

漢点字 講習用 テキスト

初 級 編
第 7 回
(全 10 回)

横浜漢点字羽化の会
2014年3月21日

目 次

9 基本文字 (5)

1. 第二基本文字 (1)

※「糸頭」	1
1 幼	
※ 「ワ冠」	2
2 写 3 与	
※ 「愛、光、文」	3
4 愛 5 光 6 文	
7 君	6
※ 「川」と「州」	7
8 川 9 州	
10 工 11 陸	8
※ 「色」と六つの色	9
12 色 13 赤 14 黒 15 黄	
16 青 17 緑 18 紫	
19 巾 13	
♪ 愛唱歌 「おさななじみ」	13
読みの練習 (25)	15
書き取り問題 (25)	17

2.	第二基本文字 (2)	
	※ 「冬頭 (文繞)、岡頭、虎頭」とその近似文字	19
	20 冬 𠄎 𠄎 𠄎 21 久 𠄎 𠄎 𠄎 22 罪 𠄎 𠄎 𠄎 23 虎 𠄎 𠄎 𠄎	
	※ 「鳥、魚、酉、酋」	22
	24 鳥 𠄎 𠄎 𠄎 25 魚 𠄎 𠄎 𠄎 26 酉 𠄎 𠄎 𠄎 27 酋 𠄎 𠄎 𠄎	
	※ 「牛、午、羊、豚、象」	24
	28 牛 𠄎 𠄎 𠄎 29 午 𠄎 𠄎 𠄎 30 羊 𠄎 𠄎 𠄎 31 豚 𠄎 𠄎 𠄎 32 象 𠄎 𠄎 𠄎	
	33 谷 𠄎 𠄎 𠄎	26
	34 雨 𠄎 𠄎 𠄎 35 兩 𠄎 𠄎 𠄎	27
	36 士 𠄎 𠄎 𠄎	28
	※ 「しかばね冠」と「おい冠」	29
	37 居 𠄎 𠄎 𠄎 38 老 𠄎 𠄎 𠄎 39 考 𠄎 𠄎 𠄎	
	♪♪ 愛唱歌 「城ヶ島の雨」	31
	読みの練習 (26)	32
	書き取り問題 (26)	33
3.	第二基本文字 (3)	
	40 冷 𠄎 𠄎 𠄎 41 衣 𠄎 𠄎 𠄎 42 米 𠄎 𠄎 𠄎	35
	※ 「延繞、支、第二進繞」	37
	43 延 𠄎 𠄎 𠄎 44 支 𠄎 𠄎 𠄎 45 遊 𠄎 𠄎 𠄎	
	46 熱 𠄎 𠄎 𠄎	39
	※ 「舟」とその近似文字「丹」	40
	47 舟 𠄎 𠄎 𠄎 48 丹 𠄎 𠄎 𠄎	
	※ 「王、将、主」	41
	49 王 𠄎 𠄎 𠄎 50 将 𠄎 𠄎 𠄎 51 主 𠄎 𠄎 𠄎	
	※ 「夕、死」	43
	52 夕 𠄎 𠄎 𠄎 53 死 𠄎 𠄎 𠄎	
	54 立 𠄎 𠄎 𠄎	44
	※ 「身、足」	46
	55 身 𠄎 𠄎 𠄎 56 足 𠄎 𠄎 𠄎	
	※ 「虫、羽」	48
	57 虫 𠄎 𠄎 𠄎 58 羽 𠄎 𠄎 𠄎	
	59 自 𠄎 𠄎 𠄎	49
	♪♪♪ 愛唱歌 「青葉城恋唄」	51
	読みの練習 (27)	52
	書き取り問題 (27)	54
	ティータイム 『銀河鉄道の夜』より	56
	【附】既習漢点字一覧	57

9 基本文字 (5)

1. 第二基本文字 (1)

今回ご紹介する基本文字は、「第二基本文字」と呼ばれる文字で、「第一基本文字（一マス漢点字）」と同様に、他の文字と組み合わせられる時、主にその文字の意味を表します。

これまでにご紹介した基本文字は、「第一基本文字」、「漢数字」、「比較文字」、「発音文字」の四つでした。これに今回ご紹介するのが、「第二基本文字」です。これは二マスで表される漢点字で、二マス目に $\begin{smallmatrix} \text{⋮} \\ \text{⋮} \\ \text{⋮} \end{smallmatrix} \begin{smallmatrix} \text{⋮} \\ \text{⋮} \\ \text{⋮} \end{smallmatrix}$ の何れか一つが付いて表されます。他の文字と組み合わせられて新たな文字を形成する時は、一マス目の点字符号が使用されて、新たな漢点字を構成します。

以下、近似文字とともに、カナ点字の五十音順にご紹介します。

※ 「糸頭」

(1) 幼 $\begin{smallmatrix} \text{⋮} \\ \text{⋮} \\ \text{⋮} \end{smallmatrix} \begin{smallmatrix} \text{⋮} \\ \text{⋮} \\ \text{⋮} \end{smallmatrix}$ ヨウ おさな - い いとけな - い

「糸頭」の右側に「力 $\begin{smallmatrix} \text{⋮} \\ \text{⋮} \\ \text{⋮} \end{smallmatrix}$ 」が置かれた形の文字です。「糸頭」とは、「糸 $\begin{smallmatrix} \text{⋮} \\ \text{⋮} \\ \text{⋮} \end{smallmatrix}$ 」の下の部分を省略した形で、糸と同様に繊維や繊維で作られたもの、繊維状のものなどを表す文字に含まれます。この文字の本来の意味は「ひねる、よじる」というもので、右側の「力 $\begin{smallmatrix} \text{⋮} \\ \text{⋮} \\ \text{⋮} \end{smallmatrix}$ 」は、それに用いられる木の棒を表していると言われます。しかしここではその意味を失って、音が同じである「おさない、いとけない」の訓読になりました。「おさない」とは、ほんの未熟な子どもを指す語で、普通学齢に満たない子どもを指します。更に未熟という意味から、成長後も精神的に未熟な人を「おさない」と形容します。「いとけない」も同様の意味で、「大変幼い、ほんの小さな」という意味で用いられます。「ヨウ」の音では、「幼年、幼少」は幼い年頃、「幼児」は幼い子ども、「幼女」は幼い女の子、「幼稚」は幼いこと、精神的に成長できずにいること、「幼稚園」は幼い子どもの教育機関です。「幼鳥」は卵から孵って巣立ちするまでの幼い鳥、雛鳥のこと、「幼魚」は卵から孵ったばかりの小さい魚、「幼虫」は成虫になる前の虫、昆虫では最後の変態をするまでの虫です。「幼生」は、成長して姿が変わるまでの個体、オタマジャクシはカエルの「幼生」です。漢点字では、「 $\begin{smallmatrix} \text{⋮} \\ \text{⋮} \\ \text{⋮} \end{smallmatrix} \begin{smallmatrix} \text{⋮} \\ \text{⋮} \\ \text{⋮} \end{smallmatrix}$ 」で表されます。「 $\begin{smallmatrix} \text{⋮} \\ \text{⋮} \\ \text{⋮} \end{smallmatrix}$ 」で「糸頭」を表します。

「幼年」 「幼少」 「幼児」 「幼女」 「幼稚園」 「幼鳥」 「幼魚」
「幼虫」 「幼生」 「幼子」 「幼妻」 「幼友達」

* 「𠄎」の漢点符号は、既に第二糸偏として「糸偏」に使用されています。更に「糸頭」が加わりました。

※ 「ワ冠」

(2) 写 𠄎𠄎𠄎 シャ うつ-す うつ-る

「ワ冠」の下に「与 𠄎𠄎𠄎」(この次にご紹介する文字です)が置かれた形の文字です。この「ワ冠」は元は「ウ冠」で、建物の屋根を象った形です。この建物は廟で、先祖の霊が祭られています。人びとはそこでお祈りを捧げます。人びとがその建物に入るとき、衣服を整えたり、履き物を替えたりするところから、人が場所を変える、物を置き換えるという意味を表すようになりました。そうして「うつす、うつる」という訓読は、元は場所を移すこと、物を移動することを意味する語でしたが、現在では別の文字がそれに当てられています。現在この文字の訓読は、紙に絵や文字を写し取る、映像をスクリーンに写す、戸籍の写しを取ると用いられます。「シャ」の音読では、「写真」はカメラで写された映像のこと、紙やスクリーンに映されます。「写本」は、印刷技術のないころ、手書きで本を写し取ったこと、そして写し取ったものです。「写経」は仏教の経典を手で書き写すこと、あるいは書き写されたお経で、「写本」の一つでしたが、現在では精神の修養として行われています。「写生」は事物をそのまま写し取ること、「写実」は、自然界や人間界のあるがままを、美化せずに写し取る表現方法です。何れも絵画や文学の主張でした。「映写」は映画を映すこと、「複写」は写しを作ること、現在ではコピー機でコピーすることを言います。「透写」は「透き写し」とも言い、透写紙を使って図像を写すこと、トレースです。「謄写版」は印刷技術の一つで、蠟引きの紙をヤスリに乗せてその蠟を鉄筆で掻き落として、インクを滲み出させて印刷するものです。「ガリ版印刷」とも言いました。漢点字では、「𠄎𠄎𠄎」で表されます。既にご紹介しているように、「𠄎」は「ワ冠」を表します。

「写真」 「写本」 「写経」 「写生」 「写実」 「映写」 「複写」

「透写」 「謄写版」 「戸籍謄本は戸籍の写しです。」

「透き写しはトレーシングのこと、透写紙は、トレーシング・ペーパーです。」

* 「𠄎」の漢点符号は、既にご紹介している通り、「第二ウ冠」と「ワ冠」の二つの冠に当てられています。

(3) 与 𠄎𠄎𠄎 ヨ

あた-える あず-かる とも-に くみ-する
漢点字では、「写 𠄎𠄎𠄎」の近似文字です。「写 𠄎𠄎𠄎」のワ冠を取った形の文

字です。元は、何人かの人の手が何か物を捧げ持つ形を象っていましたが、現在では省略されています。白川先生は、「捧げられているものは象牙のようなもの」であろうと言われています。「あたえる」とは、貴重な物を運ぶ形から、大事な物を人に与えることを言います。また、「感銘を与える、不安を与える、影響を与える」とも用いられます。「あずかる」とは「関わる、関係する」ことで、「ご紹介に与る、お褒めに与る、相談に与る」などと用いられます。「ともに」とは、協同して一つの仕事をするとところから、仲間を作って一緒に事を行うこと、「くみする」とは、そのような仲間に加わることです。「与し易し」とは、恐れるに足りない、相手にするに易しいという意味です。「ヨ」の音読では、「与党」は政権を担当する政党のこと、政治の執行権を持って、その効力を与えるという意味です。「贈与」は金品を無償で与えること、「譲与」は譲り与えること、「供与」は相手に利益を与えること、「付与」は授け与えること、「権限を付与する」と用いられます。「関与」は関わること、関係すること、「国政に関与する」、「参与」も関係することですが、相談を受ける仕事の意味の役職名として用いられます。漢文では前置詞として用いられて、訓読するとき、「…と…、…と…と」と助詞や接続詞として読まれます。また「…よりむしろ…」と、比較の副詞としても読まれます。漢点字では、「𠄎𠄎𠄎」で表されます。「𠄎𠄎𠄎」の近似文字です。

「与党」 「贈与」 「譲与」 「供与」 「付与」 「関与」 「参与」
 「感銘を与える」 「不安を与える」 「影響を与える」
 「ご紹介に与る」 「お褒めに与る」 「相談に与る」 「与し易し」

※ 「愛、光、文」

(4) 愛𠄎𠄎𠄎 アイ いと - しい いと - しむ め - でる まな

「ノツワ冠」の下に「心𠄎𠄎」、その下に「すいによう」（このテキストにはまだ出ていません）が置かれた形の文字です。後ろを振り向いてたたずむ人の形、その胸のあたりに心を加えた形の文字です。心は心臓の形、立ち去ろうとして心が後ろに引かれている人の姿を表しています。その心情を「アイ」と言います。「いとしい」は、心を残して立ち去り難い気持ち、「かなしい、可愛い」という気持ちです。「めでる」は古い表現ですが、「好む、愛する、可愛がる」という意味です。「まな」は「可愛がる」の意味で接頭語に用いられます。「愛娘（まなむすめ）」は可愛がっている娘、「愛弟子」は可愛がっている弟子です。「アイ」の音読はもっぱら「アイする」という意味の熟語を作ります。心が引き付けられて慕う、大切に思うこと、特に異性間で恋しく慕い合うことを表します。「愛情」は愛の感情、「愛育」は愛情を持って育てること、「愛妻」は愛している妻、「愛児」は愛し可愛がっている

子どもです。「愛好」は好んでいること、「愛唱歌」は好んで口ずさむ歌、「愛吟」は詩を吟ずるのを好むこと、あるいはいつも口にしている詩、「愛読書」は好んで読んでいる本です。「愛飲」は飲酒を好むこと、「愛煙」は喫煙を好むこと、「愛玩動物」は家族同様にして可愛がっている動物、「愛犬」は犬、「愛猫」は猫を愛玩することです。「愛国心」は祖国を愛する心、「愛郷心」は故郷を愛する心です。「愛顧」は商店などを客が最上にしてしていること、「愛護」は可愛がり守ることです。「恋愛」は男女の愛情、「相思相愛」は男女双方ともに思い合っている状態です。「愛別離苦」とは、仏教で言う八苦の一つ、親子夫婦の愛情と別れです。漢点字では、「𠄎𠄎」で表されます。

「愛情」 「愛育」 「愛妻」 「愛児」 「愛好」 「愛唱歌」 「愛吟」
「愛読書」 「愛飲」 「愛煙」 「愛玩動物」 「愛犬」 「愛猫」
「愛国心」 「愛郷心」 「愛顧」 「愛護」 「恋愛」 「相思相愛」
「愛別離苦」 「愛娘」 「愛弟子」

(5) 光𠄎𠄎 コウ ひかり ひか-る みつ

燃え上がっている「火𠄎」の手前に人が立っている形を象った文字と言われます。昔は「火𠄎」は神聖なものでした。その火を守ることは、大事な仕事でした。この文字の上の部分は燃えている炎、下の部分は人が立っている形です。火は夜の暗闇を照らすのに欠かせないもので、明るく燃え上がる火の形を象って、「ひかり、ひかる」という意味を表しました。現在では電気のエネルギーを光に換えたり、化学反応を応用して発光させたりできるようになりました。自然界では、太陽（光星）の発散する光とそれを反射する月の光、そして燃焼によって出る光があるだけで、つい百年と少し前までは、夜の闇は底知れないものでした。「コウ」の音読では、「光線」は光の筋、光の直進する性質を言い当てている言葉です。「光沢」は光が当たって美しく輝いている様子、「光明」は光が差し込んで明るく照らされている様子です。「光合成」は植物の葉の中で、空気中の二酸化炭素と水を原料に、炭水化物を合成する働きです。「光化学スモッグ」は、空気中の微小物質が、太陽の光のエネルギーを受けて、有毒なガスに変化したものです。「日光」は日の光、「月光」は月の光、「蛍光」は蛍の光、「電光」は雷の放電、稲妻の光です。「発光」は光を出すこと、自ら光ること、自然界では太陽（光星）や燃焼、稲妻や蛍の光、人工的には白熱電灯、蛍光灯、発光ダイオードなどがあります。「反射光」は他の光を受けて反射する光です。自然界では月の光、水面の反射光、水鏡があります。人工的にも鏡を応用した技術が巧みに使用されています。「観光」は、住んでいる土地を離れて、他の地方を見聞することです。この文字が人の名前に使われるときは、しばしば「みつ」と読まれます。漢点字では、

「㊦㊦」で表されます。

「光線」 「光沢」 「光明」 「光合成」 「光化学スモッグ」
「日光」 「光星」 「月光値千金」 「蛍光灯」 「電光」 「発光」
「反射光」 「観光」

(6) 文㊦㊦ ブン モン ふみ あや

「なべぶた」の下に、軽く弧を描いた斜めの線が交差した形の文字です。人の胸にX型に入れ墨をすることを表しています。死者から魂が抜け出すのを防いだり、子どもに邪気をつくの防いだり、成人の儀式の印にしたりしました。「あや」とは、沢山の細い線で描かれた文様で、美しい飾り文様です。子どもの額を飾ったり、成人の儀式に使われたりしました。「ふみ」とは、「文章」のこと、文字で書かれたもの、手紙、詩、特に漢詩のことです。音読は、「ブン」は漢音、「モン」は呉音ですが、使用頻度は同程度です。「ブン」と読むと「文学」は言語で表現される芸術、またそれを研究する学問です。「文章」は文字を連ねて表現されたもので、普通は散文を言います。「文案」は文章にまとめる前の案、「文意」は文章の表している内容、「文人」は文章を書くことを専門にしている人です。「文化」と「文明」を〈広辞苑〉で引いてみると、

文化_ “culture” 人間が自然に手を加えて形成してきた物心両面の成果。…

文明_ “civilization” 都市化。／ 生産手段の発達によって生活水準が上がり、人権尊重と機会均等などの原則が認められている社会、すなわち近代社会の状態。／ 人間の技術的・物質的所産。

とあります。「ブン」が後ろに付く熟語では、「案文、例文、長文、短文」のように、「文章」の性格を表す語が多くあります。「モン」では、「文章」を古く「モンジョウ」と呉音で読んで、現在より重く位置付けていました。「文章経国」とは、「文」によって国を治めるという意味の熟語で、中国から渡来した考え方です。「文」は「武」に勝るとも劣らない力を発揮するもので、国を営むのに疎かにはできない。平時ばかりでなく戦時にもこの「文」の力が試される、というのです。「文字」は文章の最も基本の要素で、「漢字」もその一つです。「文句、文言」は文章中の語句、「文字通り」とは文字で記された通りという意味です。「文様」は美しく描かれた模様、「縄文」は古い時代の土器に縄目の文様が刻まれているものです。また「モン」は、江戸時代には銭を数えるのに用いる単位でした。その一文銭を並べて数えたところから、足袋の底の長さに、また靴のサイズにも用いられました。漢点字では、「㊦㊦」

で表されます。

「文学」 「文章」 「文案」 「文意」 「文人」 「文化」 「文明」
「案文」 「例文」 「長文」 「短文」 「文章経国」 「文字」
「文句」 「文言」 「文字通り」 「文様」 「縄文」 「文月」
「恋文」 「袖文」 「落し文」

* 「𠄎」は、「学、愛、文」の冠である「ツワ冠、ノツワ冠、なべぶた」やそれに似た形の冠を表します。

(7) 君 𠄎𠄎𠄎 クン きみ

この文字の上の部分(尹)は手で杖を持つ形を象っていて、その下に「口𠄎」が置かれています。「口𠄎」はお祈りを入れる器です。手に杖を持った人が神様に祈りを捧げている様子を表す文字です。昔は、国を治める人は、神様の言葉を聞いて、それに従って政治を行いました。「クン」の音読は、そのように神様の声を聞いて政治を行う人のことでしたが、その後、国を治める最高位の人を言うようになりました。「きみ」の訓読は、古くは国家の元首、天皇陛下のことでしたが、時代が下るに従って、自分が仕える主人を指すようになりました。明治に入ると男性の朋友関係の間で、自らを「僕(ボク)」、相手を「君(きみ)」と呼び合う習慣が広まりました。これは互いを尊重し合う謙譲語の用いられ方です。「クン」の音読の熟語では、「君子」は、貴族の男子のことです。後に学識・人格ともに優れた人を言うようになりました。「君子危うきに近寄らず」、「君子に二言(にごん)無し」などの格言があります。「君臣」は君主と臣下、主人と家来のこと、「君臨」とは、国を治めること、そして他を圧倒した勢力を振るうことを言います。「主君」は自分の仕える君、主人のこと、「厳君」は他人の父親のことです。「細君」とは、自分の妻を謙って言う語、転じて他人の妻にも用います。この場合「細」は「ちいさい」の意味で、謙譲を表しています。「妻君」と書くのは間違いです。訓読では、「父君(ちちぎみ)、母君(ははぎみ)」などと用いられます。わが国の国歌である「君が代」の「きみ」は、天皇陛下のこと、「古今和歌集」にある詠み人知らずの歌にメロディーが付けられました。漢点字では、「𠄎𠄎」で表されます。

「君子」 「君臣」 「君臨」 「主君」 「厳君」 「細君」 「父君」
「母君」 「君が代」 「君子危うきに近寄らず」 「君子に二言無し」

※ 「川_川」と「州_州」

(8) 川_川 セン かわ

「三本川」と呼ばれて、大きな水の流れを象った文字です。三つの水の流れが、縦の線三本で表されています。大きな水の流れがこの「川_川」の字に、小さな水の流れが「水_水」の字になりました。「セン」の音読では、「山川草木」は自然のあるがままのこと、自然全体のこと、「河川」は大小の川の総称です。「河川敷」は、通常は水の流れていない川の両岸で、増水すると水に覆われます。「かわ」の訓読では、「川上」は川の上流を、「川下」は川の下流を、「川端」は川の岸を、「谷川」は山の間の谷を流れる川を言います。このように「かわ」の訓読は、普通名詞として多く用いられますが、また地名や人名としても多く用いられます。「石川県、香川県、神奈川県」、「大川さん、中川さん、小川さん」。わが国の川の名には、この「川_川」の文字が必ず最後に付きます。「荒川、利根川、千曲川、天竜川、大井川、四万十川、石狩川」等々。漢点字では、「_川」で表されます。

「山川草木」 「河川」 「川上」 「川下」 「川端」 「谷川」
 「石川県」 「香川県」 「神奈川県」 「大川さん」 「中川さん」
 「小川さん」 「荒川」 「利根川」 「千曲川」 「天竜川」
 「大井川」 「四万十川」 「石狩川」

* 「かわ」と訓読する文字は既に「河_河」が出ています。この文字は中国では「黄河」を指します。このように「かわ」と訓読する文字も、複数あります。

(9) 州_州 シュウ す

「川_川」の近似文字です。「川_川」の三本の線の間三つの点が挟まった形の文字です。古い字形ではこの点は楕円形で、川の流れの中に土砂が堆積してできた中州や、大陸を流れる大きな川の河口近くの、幾つにも分岐してできた広大なデルタ地帯を象っています。「シュウ」の音読は、そのような広い地帯を表しています。中国では大きな地域を指す語として用いられて、後に行政区分の名称にも使用されました。現在では広く「五大州」と言って、アジア州、アフリカ州、ヨーロッパ州、アメリカ州、オセアニア州と、五つの大陸の名称として用いられたり、カリフォルニア州、ニューヨーク州、テキサス州のように、アメリカ合衆国を構成する State の訳語として用いられたりしています。わが国では「本州、九州」と、国土の主要な島を指したり、「信州、紀州、相州、芸州」と、昔の国の名称として用いられます。漢

点字では、「𠄎𠄎𠄎」で表されて、「川𠄎𠄎𠄎」の近似文字です。

「五大州」 「本州」 「九州」 「信州」 「紀州」 「相州」
「芸州」

(10) 工𠄎𠄎𠄎 コウ ク たくみ

カタカナの「エ」に似た形の文字です。カタカナの「エ」は、この文字からできました。物を作るときに使う道具、工具を象った文字と言われます。「コウ、ク」の音読では、「工作」は物を作ること、またその道具を作ること、土木や建築の仕事の総称です。「工事」は土木や建築の作業、「工程」はそのような作業の順序や捗り具合、「工夫（くふう）」はよく考えてよい方法を考え出すことです。「起工」、「着工」は工事を始めること、「竣工」は工事が完成することです。「細工（さいく）」は細かい物を作ること、またその物、「大工（だいく）」は木造建築を建てる職人です。「たくみ」の訓読は常用漢字にはありませんが、取り分け職人仕事とそれに従事する人を言います。漢点字では、「𠄎𠄎𠄎」で表されます。

「工作」 「工事」 「工程」 「工夫（くふう）」 「起工」 「着工」
「竣工」 「細工（さいく）」 「大工（だいく）」

(11) 陸𠄎𠄎𠄎 リク おか

「こざと偏」の右側に、建物の屋根が重なった形でできた文字です。「こざと偏」は神様が降りて来る梯子の形、右側の建物は、その神様を迎える小さな幕舎と言われます。「リク」の音読は、海から見たとき、水面より盛り上がっている乾いた土地です。「おか」の訓読も、海から見た陸地のことです。「リク」の音読の熟語では、「陸運」は、陸上の輸送、「陸続」は、ひっきりなしに続く様子、「陸地」は、地球の表面で、水に覆われていないところです。「陸沈」は、賢人が俗人の間に隠れていることです。「上陸」は、陸に上がること、「着陸」は、飛行機が空中から降下して地上につくことです。この文字には「ロク」という音読もあって、漢数字の「六」として、公式の文書に用いられます。「おか」の訓読では、「陸蒸気（おかじょうき）」、「陸稻（おかぼ）」、「陸に上がった河童（かっぱ）」などと用いられます。漢点字では、「𠄎𠄎𠄎」で表されます。「𠄎」の形が、「こざと」と「おおざと」を表すことは、既に述べた通りです。

「陸運」 「陸続」 「陸地」 「陸沈」 「上陸」 「着陸」
「陸蒸気」 「陸稻」 「陸に上がった河童（かっぱ）」

※ 「色」と六つの色

(12) 色 ショク シキ いろ

色彩を表す文字です。そこから感情の豊かなこと、驚いたり喜んだり怒ったり、感動したり高揚したり、顔色や態度の変化を意味して用いられます。「ショク、シキ」の音読では、「色調（しきちょう）」は、色の濃淡や明暗などの具合、色合い。「血色」は血の色、また、顔色、顔の色艶。「容色」は容貌と顔色、見目形、美しい顔の色艶。「彩色（さいしき）」は物に色を塗って飾ること、その彩り。「気色（けしき）ばむ」とは、むっとした心の動きを顔に出すことです。「いろ」の訓読では、「色に出る」とは、心に秘めたこと、取り分け恋心が、仕草や態度に出ること、「色めく」とは、物事がはっきりして来ること、感情が露わになることです。「色は匂へど散りぬるを……」はいろは歌の冒頭です。般若心経に、「色即是空、空即是色」とあります。万物には固定的な実態はないの意味です。漢点字では、「色」で表されます。「色」を前置して、六つの色の文字が表されます。

「色調（しきちょう）」 「血色」 「容色」 「彩色（さいしき）」
「気色（けしき）ばむ」 「色合い」 「色に出る」 「色めく」
「色は匂へど散りぬるを……」 「色即是空、空即是色」

・「色」を表す文字六つ。一マス目に「色」が置かれて表されます。

(13) 赤 セキ シャク あか あか-い あか-まる
あか-める あか-らむ あか-らめる

元の字は「大」と「火」を組み合わせた形で、人の罪や汚れを清めることを表しています。「あか、あかい」とは、火の赤々と燃えている様子から、赤い色を表すようになりました。「あか」の訓読は、全く、丸ごとという意味で、言葉の前に置かれても用いられます。「真っ赤な嘘」は全くの嘘、「赤の他人」は全然知らない人、全く無関係の人、「赤っ恥」は酷い恥、全くの恥、「赤裸」は丸裸、「赤子」は生まれて間もない子です。「セキ、シャク」の音読でも、全く、丸ごと、何もないという意味で用いられます。「赤身」は裸の体、「赤心、赤誠」は嘘偽りのない心、真心、「赤地」は草木の全く生えていない土地のことです。「赤裸（せきら）」は丸ごと、飾ることのない、「赤裸裸（せきらら）」とも言います。「赤貧」は何一つ持ち物のないほど極めて貧しいことです。音読を「あかい」の意味で用いる熟語では、「赤日」は赤く輝く太陽、「赤銅（しゃくどう）」は金を数パーセント含む銅の合金、あるいはあかがね色です。この文字の他にも「あか、あかい」という色を表

す文字があります。漢点字では「𠄎𠄎」で表されます。

「赤色」 「赤身」 「赤誠」 「赤裸（せきら）」 「赤裸裸」 「赤貧」
「赤日」 「赤銅」 「真っ赤な嘘」 「赤の他人」 「赤っ恥」 「赤裸」
「赤子」 「赤心」 「赤地」

(14) 黒𠄎𠄎 コク くろ くろ-い くろ-む

「里𠄎𠄎」の下に四つ点が置かれた形の文字です。元は、袋の中に穀物を入れて、火で炙って焦がす形を象っていました。下の四つ点は「烈火」と言って、火の盛んに燃える様子を表します。「くろ、くろい」の訓読は、この焦げた穀物の色に由来しています。「コク」の音読では、「黒い…」の意味を表します。「黒衣」は黒色の衣服、「黒雲」は黒い雲、「黒煙」は黒い煙です。「黒鉛（なまり）」は鉛筆の芯に用いる物質ですが、鉛ではありません。「漆黑」は黒い漆を塗り詰めた様子、混じり気のない黒色のこと、真っ黒な状態の形容に用いられる語です。また「暗い、悪い」の意味でも用いられます。「暗黒」は全くの暗闇、「黒白」は黒か白か、罪があるかないかという意味です。「くろ、くろい」の訓読では、「黒光り」は黒く艶やかに光る様、「黒髪」は黒々とした毛髪、「黒船」は幕末にやって来たアメリカの軍艦、「黒金」は金属の鉄です。「悪い、汚れた」という意味で、「腹黒い」とか「黒い手」とも用いられます。漢点字では、「𠄎𠄎」で表されます。

「黒色」 「黒衣」 「黒雲」 「黒煙」 「黒鉛」 「漆黑」 「暗黒」
「黒白」 「黒光り」 「黒髪」 「黒船」 「黒金」 「真っ黒」
「腹黒い」 「黒い手」

(15) 黄𠄎𠄎 コウ オウ き こ き-ばむ

先端が燃えている「火矢」の形を象った文字です。「火矢」とは、矢の先に火を着けて放つ武器です。この文字の上の部分、矢の先で炎が燃えている形、中程が燃料となる油、その下が矢羽根を象った形と言われます。「き、きいろ」は、この炎の色に由来しています。中国では「き」の色は高貴な色で、天子の色とされます。方角も中央です。「きばむ」とは、秋に木の葉が黄色くなることや、布地が古くなったり汚れたりして黄色くなることを言います。「コウ、オウ」の音読では、「水戸黄門」は徳川光圀のこと、「黄門」は中納言（ちゅうなごん）のことです。「黄土」は黄色い土、中国の西北部に堆積したものが、春先にわが国まで飛来します。「黄金」は、「オウゴン」とも「こがね」とも読んで、金のことです。「卵黄（らんおう）」は卵の黄身（きみ）、幼い、未熟な者を指し手、「くちばしが黄色い」と言うのは、卵から生

まれたばかりのひよこのくちばしの色を模した表現です。「黄昏（こうこん）」とは、訓読すると“たそがれ”となります。「昏」は“くらい”、段々暗くなって人の姿を判別し難くなる夕刻を言います。「黄泉（こうせん）」とは、地下に湧く泉のこと、あの世の泉です。訓読すると“よみ、よも”となります。「古事記」には、“よみ”の国に入って、その食物を口にすると、こちらの世界に帰って来られないとあります。「黄色人種」は、東アジアを中心に居住する、主にモンゴロイドです。「黄疸」は、肝臓の病気が悪化して、胆汁が全身に回る状態を言います。漢点字では、「𠄎𠄎𠄎」で表されます。

「水戸黄門」 「黄土」 「黄金」 「卵黄」 「黄昏」 「黄泉」
「黄色人種」 「黄疸」

(16) 青 𠄎𠄎𠄎 セイ ショウ あお あお-い

草木の芽生える姿を象った文字です。上の部分は、「生 𠄎𠄎𠄎」の左肩の「ノ」のない形で、「生 𠄎𠄎𠄎」と同様に、芽生えの形を表します。下は「月 𠄎𠄎」、元は「丹（この後に出て来ます。）」、青や赤の絵の具の原料となる鉱物です。

“あお、あおい”の訓読も、草木の若葉が力強く地上に現れることを意味します。従って“あお、あおい”という言葉は、空の青さである「ブルー」ばかりでなく、しばしば「グリーン」を指します。季節は春、若さ、瑞々しさ、未熟さ、そしてエネルギーに溢れた生命力を表す言葉です。“セイ、ショウ”の音読の含まれる熟語では、「青春」は人生の春にたとえられる、若さ溢れる時期、「青年」はそんな年頃の男女、とりわけ男性を言います。「青雲」は青い雲、晴れた空、また高位・高官のたとえ、「青山」は青々としている山、「青果」は野菜と果物、「群青（ぐんじょう）」は鮮やかな藍色です。

“あお”の訓読では、「青写真」は図面の複製、また心に描いている計画、「青天井」は青空は果てしなく高いところから、値段や数値が、無制限に上がることです。そのほかに「青二才」、「青瓢箪」、「青畳」など、“あお”が前に置かれる熟語は沢山あります。古く中国で紙が発明される前に、竹簡と呼ばれる竹の札に文字を書きました。「青史」はその竹簡に書かれた歴史です。中でも知られているのが司馬遷の「史記」です。「青は藍より出でて藍より青し」とは、弟子が師匠を超えることを言い、「出藍の誉れ」とも言われます。「藍」は、青色に染める染料が取れる植物です。漢点字では、「𠄎𠄎𠄎」で表されます。

「青色」 「青春」 「青年」 「青雲」 「青山」 「青果」 「群青」
「青写真」 「青天井」 「青二才」 「青瓢箪」 「青畳」 「青史」
「青は藍より出でて藍より青し」 「出藍の誉れ」

(17) 緑 𠄎𠄎𠄎 リョク ロク みどり

「糸𠄎偏」の右側に「リョク、ロク」の音を表す形が置かれた文字です。「みどり」は、青と黄を交えた中間色で、植物の若葉の色、瑞々しく生命力に溢れた色です。「リョク、ロク」の音読では、「緑陰」は樹木の葉に覆われて直射日光が射さない陰、「緑風」はそのような陰に流れる涼しい風、「新緑」は初夏の若葉の瑞々しい緑です。「緑樹」は葉の生い茂った樹木、「葉緑素」は草木の葉の中にあつて、光合成で植物のエネルギーを作り出し、空気中に酸素を放出する物質です。「緑地」は草木の生い茂っている土地、「緑土」はそのような国土です。「緑茶」は私たちが普通に飲んでいるお茶、緑色のお茶です。「緑青（ろくしょう）」は銅に生じる緑色の錆で、毒を含むと言われます。「みどり」の訓読で色を表す語では、「黄緑」は黄の勝った緑、「青緑」は青がかつた緑、深みのある緑、「深緑」は濃い緑色です。また「緑の黒髪」は黒々とした髪、「緑児」はごく幼い、二、三歳の子どもです。漢点字では、「𠄎𠄎」で表されます。

「緑色」 「緑陰」 「緑風」 「新緑」 「緑樹」 「葉緑素」
 「緑地」 「緑土」 「緑茶」 「緑青」 「黄緑」 「青緑」 「深緑」
 「緑の黒髪」 「緑児」

(18) 紫𠄎𠄎 シ、むらさき

この文字は、上の部分は左に「止𠄎」、右に「比𠄎」の半分であるカタカナの「ヒ」の形、その下に「糸𠄎」が置かれた形です。上の部分は「ここ、これ」と読む文字で、「シ」という音読を表します。「むらさき」とは、その根から紫色の染料が取れる草の名前で、夏に白い小さな花を沢山咲かせます。花が群がって咲くところから、「むらさき」と呼ばれたと言われます。この染料で染めると、赤と青を交えた中間色に染まります。この色を「むらさき」と呼ぶようになりました。紫色は高貴な色とされて、宮中には「紫宸殿」のように、天皇陛下の居所の名に使用されています。「シ」の音読の熟語では、「紫衣（しい）」は紫色の衣、高貴な人が着た、「シエ」とも読みます。「紫雲」は紫色の雲、めでたい印、「紫紺」は紫色を帯びた紺色。「むらさき」の色には、「江戸紫」と呼ばれる染料があつて、武蔵野に自生する紫草を栽培して取った染料です。これは青のかかった紫色と言われます。「濃紫」は濃い小豆色のかかった紫色で、王朝時代には、最も位の高い色とされました。万葉集にある「茜さす紫野行き標野（しめの）行き」の「紫野」とは、この紫草を栽培した野、「標野」は天皇直轄の地のことです。漢点字では、「𠄎𠄎」で表されます。

「紫色」 「紫衣」 「紫雲」 「紫紺」 「江戸紫」 「濃紫」

「茜さす紫野行き標野（しめの）行き」

* 「色𠄎𠄎𠄎」と六つの色をご紹介します。

(19) 巾𠄎𠄎𠄎 キン コン はば

「円構え (冂)」に、縦線を重ねた形の文字です。「ひざかけ」や「まえかけ」を象っています。訓読の「はば」は、一定の幅に裁断された布地のことで、一定の横の広がりという意味しています。「キン」の音読は、布を裁断したものの意味から、その布地の用途を表す熟語に含まれています。「巾着」は、布で作った袋の口を、紐で引き締めて閉じるようにしたものです。中に金銭を入れたりしました。「三角巾」は三角形の布です。頭を覆って保護したり、怪我をした時の包帯の一種として用いられます。「頭巾」は頭を覆って保護する布、「布巾」は食器や食卓を拭く布、「茶巾」は茶碗や茶釜を拭く布、「手巾」は手拭い、ハンカチ、「雑巾」は板の間などの床を拭く布です。漢点字では、「𠄎𠄎𠄎」で表されます。この文字は、「巾偏」として、また傍の要素として多くの文字の中に含まれます。また「はば」と訓読される文字は、普通「フク」と音読される文字（幅）が用いられます。この文字は用いられません。「フク」の音読の文字の中にも、「巾偏」としてこの文字が含まれています。

「巾着」 「三角巾」 「頭巾」 「布巾」 「茶巾」 「手巾」
「雑巾」

* 第一基本文字の「市𠄎」は、この「巾𠄎𠄎𠄎」の上になべぶたが乗った形の文字です。

♪ 𠄎𠄎𠄎𠄎𠄎歌

おさななじみ

作詞 𠄎𠄎 𠄎𠄎𠄎輔
作𠄎𠄎 𠄎𠄎村 𠄎𠄎𠄎𠄎

𠄎𠄎 𠄎𠄎なじみの𠄎𠄎い𠄎𠄎は
𠄎𠄎いしモンの𠄎𠄎がする
𠄎𠄎じるまぶたのその裏に
𠄎𠄎い姿の𠄎𠄎と𠄎𠄎



お々つないで幼稚園
積み・プランコ・芝居
胸にさがったハンカチの
の名前が読めたっけ



校の運
は はピリ
泣きたい気ちでゴールイン
そのまままで駆けたっけ



ニキビの に顔がある
毎鏡とにらめっこ
セーラー服がよく似う
が他ににえたっけ



すあてなしのラブレター
書いて度も読みし
あなたのイニシャルとなく
書いて破いててたっけ



校 から久しぶり
バッタリ たら とも
アベック同士のすれ違い
眠れなかった夜だっけ



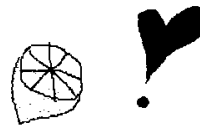
あくる あなたに電して
をしたいとったとき
急に じた胸騒ぎ
の霧が晴れたっけ



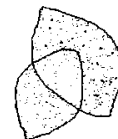
その うちのプロポーズ
その夜のうちの づけは
なじみの幸せに
香るレモンの だっけ



あれから たちは
い陽気なパパとママ
それから な は
お々つないで幼稚園



なじみの い は
いレモンの がする
のしるしの し は
遠い の と



※ 昭 (1963) 表。

読みの練習 (25)

- (1) ここが幼稚園の建設予定地です。
- (2) はまだいなあ。
- (3) ききが。
- (4) を残そうね。
- (5) あのにきしだね。
- (6) 夜でもよくせるよ。
- (7) 物にエサをえる。
- (8) おほめにりまして…。
- (9) もそのにしていた。
- (10) くしてきられない。
- (11) しいよ。
- (12) 美しいをでる。
- (13) あの師匠の弟ですよ。
- (14) 菩薩と菩薩。
- (15) 強いがまぶしい。
- (16) 蛍のお尻がるんだよ。
- (17) 名前をといます。
- (18) 名でをうならす。
- (19) 句をうな。
- (20) なんて今では死かな。
- (21) 章のいしをと表します。
- (22) 名とわられた殿。
- (23) 「の名は」という気ドラマがあった。
- (24) 山。
- (25) のがつく苗は多い。
- (26) の長は今のどこでしょう。
- (27) 砂がたまってに現れたをという。
- (28) は作がきだった。
- (29) でもしてを作ります。
- (30) で物を作る職を特にとった。

書き取り課題 (25)

- (1) ようじごをはなしている。
- (2) おさないときのかお。
- (3) いとけないはふるいいいかたです。
- (4) むかしはぜんぶひっしやでした。
- (5) げんがをひたすらうつす。
- (6) うらがわのもじがうつつている。
- (7) かんがえるじかんをあたえよう。
- (8) わたしもそうだんにあずかった。
- (9) かれはくみしやすいひとでしたよ。
- (10) まわりのすべてのひとをあいした。

- (11) なんていとしいひとだろう。
- (12) つきをめでさけをのむ。
- (13) まなむすめです。
- (14) みにあまるこうえいです。
- (15) しょくぶつはひかりをとりいれてこうごうせいをする。
- (16) よぞらにひかるほしとつき。
- (17) おみつさんとよばれたむすめ。
- (18) ぶんしょうをかくのがだいすき。
- (19) さんもんばんでいいからおしてよ。
- (20) ふみよむつきひかさねつつ…。

- (21) きんぎんさんごにあやにしき。
- (22) なまえのしたにはくんとつけよう。
- (23) きみ、きみちよつとまちがつてるよ。
- (24) しゅうごとにほうりつがちがうくに。
- (25) さんかくすはかこうちかくにできる。
- (26) こうじげんばでかこうする。
- (27) ちちのしょくぎょうはだいくです。
- (28) だいくさんをたくみともいいます。
- (29) やまもかわももりもあるのがりくち。
- (30) もはやりくにあがったカップです。

- (31) かくちほうのとくしよくをしらべる。
- (32) しきしになまえをかく。
- (33) さんしよくすみれのはな。
- (34) せきじゅうじはしろじにあかいじゅうじけい。
- (35) しゃくどういろのたいよう。
- (36) うまれたばかりのあかんぼう。
- (37) あかいいろのふだがあたりだよ。
- (38) はずかしくてかおがあかまるきぶんだよ。
- (39) こくぼんにじをかく。
- (40) くろつちにはえいようがあるんだ。

- (41) はらのくろいひと。
- (42) くろずむよりくろむのほうがていどがおおきい。
- (43) こうがはちゅうごくだいにのかわ。
- (44) おうとうはかんづめようにつかう。
- (45) きいろはよくめだつ。
- (46) あせできばんだしたぎ。
- (47) せいしゅんじだいのうた。
- (48) ろくしょうはどうのひょうめんにしょうずる。
- (49) あおなにしお。
- (50) あおいさんみやく。

- (51) りよくいんこどもかい。
- (52) このはのいろはみどりです。
- (53) しこんはムラサキのねのかわからとるせんりょう。
- (54) こらい、むらさきはこうきのいろです。
- (55) むかしばなしのおじいさんのずきん。
- (56) じょうげどうのはばがちいさい。

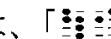

* * * * *

9 基本文字 (5)



2. 第二基本文字 (2)

※ 「冬頭(文繞)、罔頭、虎頭」とその近似文字。

(20) 冬  トウ ふゆ

「ふゆがしら」の下に「ㄥ (にすい)」が置かれた形の文字です。「ふゆがしら」は、編んだ糸の最後を結んで止める形に由来して、「おわり、とめる」の意味を表します。この「ふゆがしら」の下に「ㄥ」を置くことで、凍てつく季節である“ふゆ”を表す文字となりました。“ふゆ”は、一年の中でも最も寒さの厳しい季節で、生きるもの全てがエネルギーの消費を最小限に抑えて、来る春を待つ季節です。西暦の暦では、十二・一・二月の三カ月、天体の運行からは、冬至から春分までの三カ月が“ふゆ”です。陰暦では立冬から立春まで、現在の十一月から二月初めが“ふゆ”とされます。旧暦の立春と正月がほぼ重なることと、新年を物事の始まる「春」と位置づけて、年が変わることで“ふゆ”が終わり、春が始まるとされました。“トウ”の音読は、“ふゆ”の季節に関わる熟語を作ります。「冬至」は昼間の時間が最も短く、夜間が長い日です。この日から先、寒さの厳しい日が続きます。「冬季」は冬の季節、「冬期」は冬の寒い期間、「冬眠」は冬の期間を眠って過ごすことで、熊ややまねなどの哺乳類、亀や蛇、蛙などの変温動物に見られます。「初冬」は冬の初め、「越冬」は冬を越すこと、「厳冬」は寒さの厳しい冬、「暖冬」は普通の年より暖かい冬です。また季節を色分けして、「春」は「青」、「夏」は「朱(赤)」、「秋」は「白」、そして「冬」は「玄(黒)」とされます。“ふゆ”の訓読では、「冬休み」は年末・年始の休暇、「冬籠り」は冬の寒い時期は外へ出ないことを言います。「冬来りなば春遠からじ」という格言もあります。漢点字では、「」で表されます。「」は「ふゆがしら」の形です。

* 「ふゆがしら」の形に酷似した形に、「すいによう」があります。

「ふゆがしら」は編んだ糸を結んで閉じる形を表しますが、「すいによう」は、気持ちが悪く後ろに引かれながら進む、のろのろと足を運ぶという意味があります。しかも形からの区別の困難な文字が多くあります。漢点字でも「、」と、同じ符号が用いられます。そのためにこのテキストでは、文字の上方に位置するものを「ふゆがしら」、下方に位置するものを「すいによう」と呼ぶことにします。

「冬至」 「冬季」 「冬期」 「冬眠」 「初冬」 「越冬」 「厳冬」
「暖冬」 「青春、朱夏、白秋、玄冬」 「冬休み」 「冬籠もり」

「冬来りなば春遠からじ」

* 「愛_ㇰ_ㇱ_ㇲ」の中に、「すいによう」が含まれています。「心が後ろに引かれて進めない」という意味です。

(21) 久_ㇰ_ㇱ_ㇲ キュウ ク ひさ - しい

「ふゆがしら」の近似文字です。訓読の“ひさしい”とは、時間が長く経過している、行く末が長いという意味です。「久し振り」とは、長い間時間が経っている状態のこと、長く会わずにいた人と顔を合わせる時などに用いられる語です。“キュウ、ク”の音読では、「永久」は果てしなく長く続くこと、「持久」は長時間持ちこたえること、「持久力」はその力、「耐久」は長時間耐えること、長持ちすることです。仏教の言う「久遠（くおん）」とは、時の限りないこと、無窮のことです。訓読の“ひさしい”を含む熟語では、「幾久しく」とは、未来永劫、生きる限りという意味で、男女が結ばれる時などに用いられます。古い言葉に「久方」があります。『広辞苑』には、「(枕詞「ひさかたの」から) 天(あめ)・空(そら)・日・月・雲・都などの称。古今雑「久方の中に生ひたる里なれば光をのみぞ頼むべらなる」とあります。漢点字では、「_ㇰ_ㇱ_ㇲ」で表されます。

「久遠」 「永久」 「持久力」 「耐久」 「幾久しく」 「久方」

(22) 罪_ㇰ_ㇱ_ㇲ ザイ つみ

「あみがしら」の下に「非_ㇰ_ㇱ_ㇲ」(このテキストにはまだ出ていません)の置かれた形の文字です。“つみ”は、法律や道徳、習慣など社会の規範に反することです。法律を犯せば裁判によって処罰されます。宗教上の教えを犯すことも“つみ”です。そこから実際に法律を犯さなくとも、無慈悲なこと、思いやりのないことを、“つみ”と呼びます。「子どもには罪はない」、「罪なことをする」、「罪を着せる」、「罪を悪んで人を悪まず」などと用いられます。“つみ”は、人が他の動物から人になったころから人の心を占めていた意識と考えられます。わが国の最も古い書物「古事記」と「日本書紀」に、「天つ罪(あまつつみ)」と「国つ罪(くにつつみ)」という言葉があります。前者は素戔鳴尊が高天原で犯した罪で、田の畔を切ったり治水用の溝を埋めたりしたものです。後に朝廷の下す刑罰を意味する語となりました。後者は、人びとが国土で犯した罪です。現在の刑法罪に当たります。この文字の上方に位置する「あみがしら」は、「目_ㇰ_ㇱ_ㇲ」の字を横にした形から「横目」とも呼ばれます。この「あみがしら」の形は、竹で編んだ籠を象ったものですが、同じ形で「目_ㇰ_ㇱ_ㇲ」の字に由来するものもあります。また「ワ冠」の下に漢数字

の「八」が置かれた形も「あみがしら」です。注意の必要な部首です。

“ザイ”の音読の含まれる熟語では、「罪過」は罪と過ち、「罪状」は犯罪の実状、「冤罪（えんざい）」は無実の罪、「謝罪」は罪や過ちをあやまること、「流罪」は罪人を辺境の地や島に流す刑罰、死罪につぐ重い刑罰です。「罪科」は“ザイカ”とも“つみとが”とも読みます。漢点字では「𠄎𠄎」で表されます。「𠄎」は、「あみがしら」の漢点字符号です。

- * 「あみがしら」は、文字の上方に位置するものを指しますが、本テキストでは、「目𠄎」を横にした形は、位置に関わらず、「あみがしら」と呼ぶことにします。

「罪過」 「罪状」 「冤罪」 「謝罪」 「流罪」 「天つ罪」
「国つ罪」 「罪科」 「子どもには罪はない」 「罪なことをする」
「罪を着せる」 「罪を悪んで人を悪まず」

(23) 虎𠄎𠄎 コ とら

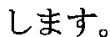
「とらがしら」に「ひとあし」を加えた形の文字です。“とら”とは、中国で最も強い猛獣です。「強い、雄々しい、猛々しい、荒々しい」という意味を含みます。「とらがしら」は、“とら”の頭の形、口を開いて一声吠えている様子象っています。この部首は、人が虎の皮を被って扮装して、虎の強さ、猛々しい姿に肖（あやか）って、戦勝祈念の舞を舞う姿を表すものです。“コ”の音読では、「虎穴に入らずんば虎児を得ず」の格言があります。危険を冒さなければ望みのものは得られないという意味です。“とら”は危険な相手ではありますが、憧れの相手でもありました。「龍虎」は龍と虎、実力の伯仲した二人、「白虎」は、白い虎、西方を守る神です。“とら”の訓読では、「虎の子」は、虎は子どもを大切に育てることから、大事なもの、とっておきのもの、「虎の威を借る狐」とは、権力者の力を笠に着て威張ること、「虎の尾を踏む」とは、極めて危険なことをすること、「虎の巻」は兵法の秘伝書のこと、現在では種本の意味で、他人に知られないようにそっと盗み見する本です。漢点字では、「𠄎𠄎」で表されます。「𠄎」が「とらがしら」の漢点字符号です。

「虎穴に入らずんば虎子を得ず」 「龍虎」 「白虎」 「虎の子」
「虎の威を借る狐」 「虎の尾を踏む」 「虎の巻」

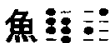
- * 「𠄎」の漢点字符号で表す部首は、「発頭、冬頭、罔頭、虎頭」と四つあります。その他に「久𠄎𠄎」や「癸𠄎𠄎」が出て来ました。

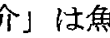
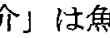

※ 「鳥、魚、酉、曾」

(24) 鳥  チョウ とり

頭と尾羽と翼のある鳥を象った文字です。「とり」は鳥類の総称です。鳥の名を表す文字には、この字が多く含まれます。「チョウ」の音読では、「鳥獣」は鳥と獣、「鳥獣戯画」は京都高山寺に伝わる絵巻で、動物を擬人的に描いたものです。「花鳥風月」は天地自然の美しい景色、風流な遊び、長くわが国の美的価値観の中心でした。「鳥瞰」は鳥が高い所から見るように見下ろすこと、「鳥瞰図」はそのようにして写し取った風景図や地図で、「鳥目絵（とりめえ）」とも言います。「野鳥」は自然に生息する鳥、「水鳥」は水を好む鳥、白鳥や雁など、「スイチョウ」とも「みずとり」とも読みます。「とり」の訓読では「渡り鳥」は、季節によって住む場所を変える鳥、毎年決まって長い距離の渡りをします。漢点字では、「」で表されます。

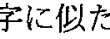
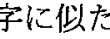
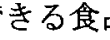
「鳥獣戯画」 「花鳥風月」 「鳥瞰図」 「鳥目絵」 「野鳥」
「水鳥」 「渡り鳥」

(25) 魚  ギョ うお さかな

魚の頭と胴体の骨格と尾びれを象った文字です。頭を上、尾を下と、縦に置かれています。この文字の本来の訓読は「うお」で、「さかな」は元来、酒の添え物の意味でした。その「さかな」に「うお」が好んで用いられたので、やがて「うお」を「さかな」と呼ぶようになりました。「さかな」は、水の中に棲んでエラ呼吸をする動物です。わが国ではこれを常食にして来ました。「ギョ」の音読では、「魚類」は水棲のエラ呼吸をする脊椎動物を一括した語です。例外的に肺呼吸をしたり、魚にはない脚の痕跡のあるものもあります。「魚肉」は魚の肉、食用です。「魚影」は魚の影、漁業で使用する魚群探知機に映る影です。「淡水魚」は真水、川や湖に棲む魚、「海水魚」は海に棲む魚です。「回遊魚」は広い大洋を泳ぎ回る魚です。鮪、鰯、鯉などです。「近海魚」は沿岸の近くに棲んで、あまり移動しません。鯛、平目、鰈などがいます。「魚介」は魚と貝、「介」は「貝」のこと、「魚介類」は魚や貝など、水棲の動物の総称です。漢点字では、「」で表されます。

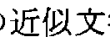
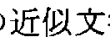
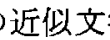
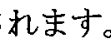
「魚類」 「魚肉」 「魚影」 「淡水魚」 「海水魚」 「回遊魚」
「近海魚」 「魚介類」

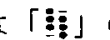
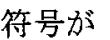

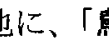
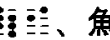
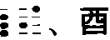
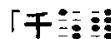
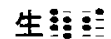
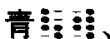
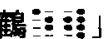
(26) 酉  ユウ とり

「酉 」の字に似た形の中に、横線が一本入った形の文字です。「酉 」に似た形は口の細い容器で、中の横線は、そこまで液体が入っていることを表しています。この容器は、中の液体をじっくり発酵させています。できるものはお酒です。つまりこの文字は、穀物などを発酵させて酒を造るための酒樽を象ったものです。「ユウ」という音読を含む熟語は余りありません。「とり」の訓読は、十二支の十番目の「とり」です。文字の成り立ちには関わりませんが、「とり」と読まれるようになりました。方角では西、時刻では午後六時前後二時間を指します。「とり」を含む熟語では、「酉の市」は鷲神社の祭礼、十一月の酉の日に熊手を売る露店が出るので有名なお祭りです。「酉の日」は毎日を十二支に当てて酉に当たる日で、十一月の酉の日に、酉の市が立ちます。「酉の刻」は「酉の時」とも言われて、午後六時の前後二時間を指します。この文字は部首として、お酒に関する文字、発酵に関する文字、発酵してできる食品などを表す文字を構成します。漢点字では、「」で表されます。

「酉の市」 「酉の日」 「酉の刻」 「酉の時」

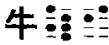
(27) 酋  シュウ シュ

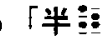

「酉 」の近似文字です。「酉 」の上にカタカナの「ソ」、または漢数字の「八」の形の印を乗せた形の文字です。このカタカナの「ソ」、または漢数字の「八」の印は、酒樽である「酉 」の上から、酒の香気が立ち上る様子を表しています。酒は、中国の殷や周の時代には、神さまとの対話に欠かせない飲み物で、大変大切にされました。その酒が入った容器から香気が立ち上る形のこの文字は、よいもの、大切なものという意味から、神さまとやり取りする首長を表すようになりました。「シュウ」の音読の熟語では、「酋長」は一族の長、人の集団を治める首領です。「酋領、酋帥」も「酋長」と同様です。「巨酋」は大親分です。訓読はありませんが、その他に諸味を搾って酒を取る、発酵して搾れるようになった酒、最後を締め括る、仕上げるという意味があります。多くの文字の構成要素になっています。漢点字では、「」で表されます。

- * ここでは「」の符号が「食 」の他に、「鳥 、魚 、酉 、酋 」とそれを含む文字を表すことをご紹介しました。他にも「千 、生 、青 、鶴 」などもご紹介しております。

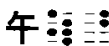
「酋長」 「酋領」 「酋帥」 「巨酋」

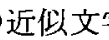
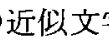
※ 「牛、午、羊、豚、象」

(28) 牛  ギュウ うし

漢数字の二に縦の線を交差させて、左肩に斜めの線を添えた形の文字です。動物の牛を、前から見た形を象っています。真ん中の縦の線は牛の胴体を、下の横の線は、左右に張った腰の骨、左上の斜め線は、角を表しています。牛は、神さまに捧げる犠牲として大変珍重された動物でした。既にこのテキストに出ている「半 」は、牛を半分に切って神さまの犠牲にすることを表す文字です。「ギュウ」の音読の熟語では、「牛飲」は牛が水を飲むように、大酒を飲むこと、「牛飲馬食」は牛が水を飲むように、馬が馬草を食うように飲食することです。「牛後」は牛のしり。強い者に服従する者をたとえた語、「牛馬」は牛と馬、「牛歩」は歩くのが遅いこと、「牛毛」は牛の毛、数の多いたとえです。「牛耳る」とは、昔、牛の耳を切って、その血を啜って誓い合ったことから伝わる言葉で、集団の運営を、一人あるいは少数の人に委ねることを言います。わが国の平安時代に貴族が愛用した乗り物に「牛車」があります。牛にひかせる車で、「ギュウシャ」ではなく「ギツシャ」と呼ばれます。七月には七夕が巡って来ますが、織り姫星と彦星の彦星は、「牽牛」と呼ばれます。牛飼いのことです。「うし」の訓読では、多くの格言があります。「牛に経文」は「馬の耳に念仏」と同義で、幾ら説き聞かせても分からないこと、「牛にひかれて善光寺参り」とは、偶然よいことに巡り会うこと、「牛の寝た程」とは、ものの沢山ある形容、山ほど、「牛の骨」は「馬の骨」と同様、素性の知れない者、「牛は牛づれ馬は馬づれ」は、類を同じくする者が相伴うことと、沢山あります。漢点字では、「」で表されます。

「牛飲馬食」 「牛後」 「牛馬」 「牛歩」 「牛毛」 「牛耳る」
 「牛車」 「牽牛」 「牛に経文」 「牛にひかれて善光寺参り」
 「牛の寝た程」 「牛の骨」 「牛は牛づれ馬は馬づれ」

(29) 午  ゴ うま

「牛 」の近似文字です。「午 」は漢数字の二と縦の線を交差させた形ですが、この文字では、縦の線が上の横線より上には出ません。文字の成り立ちは全く異なっていて、穀物を搗いて粉にするのに用いる杵の形に由来しています。現在では音読でも、訓読の「うま」の意味で用いられるのが一般です。この「うま」は、十二支の七番目に位置して、方角は南、時刻は昼の十二時を表します。ちょうど太陽が南中（真南を通ること）する時刻で、「正午」と言います。「子午線」はその地点を通る経線のこと、北と南を結ぶ線という意味です。「午睡」は昼寝をすること、「午前」は夜の十二時から昼の

十二時までの間、「午後」は昼の十二時から夜の十二時の間です。また「さからう」という意味もあって、「午逆」と用いられます。漢点字では、「𠂔𠂔𠂔」で表されます。

「正午」 「子午線」 「午睡」 「午前」 「午後」 「午逆」

* 十二支の動物に当てられた文字が、これまでに四字出て来ました。

「子(ね)」「午(うま)」「未(ひつじ)」「酉(とり)」です。

(30) 羊 𠂔𠂔𠂔 ヨウ ひつじ

動物の羊を前から見た形を象った文字です。漢数字の三と縦線を交差させて、その上に小さな点を添えて角を表した形の文字です。モンゴル平原では、古くから家畜として飼育されていました。毛は羊毛やフェルトとして衣料や住居に、肉は食用に、皮も衣服や住居用に用いられました。中国では牛と同様に、神さまに捧げられる犠牲として珍重されました。羊は牧畜で飼育されることから、明治に入るまでわが国では飼われませんでした。文字を通して知られていました。「ヨウ」の音読の熟語では、「羊毛」は羊の毛、「羊皮」は羊の皮、「羊皮紙」は羊やその他の動物の皮を薄く柔らかくして、光沢を持たせて、現在の紙のように、文字を書くのに用いたものです。「羊羹」は、元は羊の肉を使った食品でしたが、現在のわが国では、高級和菓子の代表です。「羊頭狗肉」とは、羊の頭を看板に出しながら、実際は犬の肉を売ること、見かけが立派で実質が伴わないことのとえです。「牧羊」は羊を飼うこと、「緬羊」は羊毛を取る羊、「羚羊」はインパラやオリックスなど、牛科の草食動物です。羊は大変美しい動物とされて、「美、善、養、鮮」など、明るい、積極的な、良い意味の文字を構成しています。漢点字では、「𠂔𠂔𠂔」で表されます。

「羊毛」 「羊皮紙」 「羊羹」 「羊頭狗肉」 「牧羊」 「緬羊」
「羚羊」

(31) 豚 𠂔𠂔𠂔 トン ぶた

「肉月」の右側に「いのこ」が置かれた形の文字です。「いのこ」は、「家𠂔」の字のウ冠の下に置かれている形で、犠牲の動物を表しています。豚は、犬、牛、羊とともに、神さまに捧げられる犠牲として重要な動物でした。「いのこ」とは猪の子どもの意味で、豚が猪を家畜化したものであることを表しています。文字にも「いのこ」の縞模様が残っています。「肉月」について白川先生は『常用字解』に、「豚の字形はいのこの腹部に月(肉)を加え

ており、豚の腹部の肉を示すものか、または子をはらんでいる豚を示すものであろう。」と記しておられます。現在は豚は、食用としてのみ飼育されています。「トン」の音読の熟語では、「豚舎」はぶた小屋、「養豚」はぶたを飼うことです。「河豚（かとん）」は魚のフグの異名、「豚児」は我が子と呼ぶ謙遜語です。漢点字では、「𠂔𠂔𠂔」で表されます。この字形は、「いのこ」として生かされて、「いのこ」の含まれる文字には、「𠂔𠂔𠂔」の形で漢点字に反映されます。

「豚舎」 「養豚」 「河豚（かとん）」 「豚児」

(32) 象𠂔𠂔𠂔 ショウ ゾウ かたど-る

「象𠂔𠂔𠂔」の近似文字です。この文字の中には、「いのこ」の形が含まれています。陸上で最も身体の大きな動物である「ゾウ」を象った文字です。象は昔、中国にも生息していて、土木工事などに使役されていました。身近にいてしかも目立つ動物だったはずです。訓読の「かたどる」とは、ものの形を写し取る、似せて描く、あるいは形のないものに形を与えるという意味で、「ショウ」の音読が表すのは、その「姿や形、似せて描く」という意味です。「ショウ」の音読の熟語では、「象形」はものの形を象ること、写し取ること、「象形文字」はそのようにして作られた文字で、漢字の構成である「六書（りくしょ）」の一つです。「日、月、人、木」などがあります。「象徴」はシンボルのこと、「天皇は国の象徴」。「形象」は人が知覚する形や姿、「現象」は表に見えるもの、観察できることから、「気象」は大気の状態とその中で起こる現象、「対象」は客体、相手、目標とするもの、「印象」は強く心に残ったものです。「ゾウ」の音読では、「象牙」は象の牙、ピアノの鍵盤などに使用されて、高級な素材として珍重されました。「象牙質」は、口の中の歯の組織です。漢点字では、「𠂔𠂔𠂔」で表されます。

* 以上ご紹介した「馬、牛、羊、豚、象」は多くの文字の構成要素となります。漢点字では「𠂔𠂔、𠂔𠂔」の形を、草食動物を表す要素としました。ただし「むじな偏」も「𠂔𠂔」が当てられますので、注意が必要です。

「象形」 「象形文字」 「象徴」 「形象」 「現象」 「気象」
「対象」 「印象」 「象牙」 「象牙質」

(33) 谷𠂔𠂔𠂔 コク たに や

谷の形を象った文字です。上に漢数字の「八𠂔𠂔𠂔」、その下に三角屋根の形、その下に「口𠂔𠂔」が置かれています。「八𠂔𠂔𠂔」は山並みが迫っていることを、

三角屋根と「口𠄎」は狭い谷の入り口を表しています。「たに」とは、隆起した土地の間、山と山の間のことです。左右から山が迫って、土地は狭く、道は陰しく、日の当たらない陰になったところです。また「たに」は水の湧き出るところで、人の生活に欠かせない水の供給源です。そこで古くから、谷の入り口には、水の神様をお祭りしていました。「コク」の音読の熟語はあまりありませんが、「山谷」は山と谷、山間の谷、「幽谷」は人里から離れた奥深い谷で、「深山幽谷」と用いられます。「たに」の訓読では、「谷風」は谷をわたる風、「谷川」は谷を流れる川、「谷間」は「たにあい」とも「たにま」とも読んで、深い山と山の間です。「や」の訓読は、山の陰の湿った土地を意味していて、「やち、やつ、やと」とも言われます。「たに、や」の訓読は、また地名や人名に多く用いられています。漢点字では、「𠄎𠄎」で表されます。

「山谷」 「深山幽谷」 「谷風」 「谷川」 「谷間」

(34) 雨𠄎𠄎 ウ あめ あま

空から雨が落ちる様子を象った文字です。形は、一の下に巾に似た形があり、その中に縦に並んだ二つの点が、真ん中の縦線を挟んで左右にあります。この四つの点が雨粒を表して、一番上の一（横線）が、空を表しています。「あめ、あま」の訓読は、「天𠄎𠄎」の訓読である「あめ、あま」と通じると言われます。この文字は、空から降る水である「あめ」を意味します。古くから水は、人間にとって最も大切なものでした。人びとの命を支えるために欠かせないものです。しかしそれとともに水は、人びとの生活を脅かす、災害をもたらす恐ろしい存在でもあります。中国の伝説上の王様である「禹」は、洪水を治めるために奔走しました。同様に「湯」という王様は、日照りの続く時に、雨乞いをして雨を降らせて、人びとの生活を救ったと言われています。「ウ」の音読の熟語は、そのような天の恵みと天の威力である天候を意味します。「雨季」は特に雨の多く降る季節、「雨天」は雨降り、雨の降る天気、「雨中」は雨の降る中、「雨後」は雨上がりです。「雷雨」は雷を伴った雨、「煙雨、細雨」は霧雨、「降雨」は雨が降ること、「豪雨」は短時間のうちに大量に降る雨です。「慈雨、甘雨」は万物を潤し育てる雨、日照りの時の恵みの雨です、「梅雨（バイウ、つゆ）」は、六月から七月にかけて降る長雨です。「あめ、あま」の訓読では、「雨具（あまぐ）」は雨降りに身に付ける道具、「雨傘、雨靴」などです。「雨戸」は雨よけの板戸、「雨垂れ」は軒先などから落ちる雨粒、「雨音」は雨の落ちる音、「雨宿り」は雨の止むのを待つために、軒下などに入ること、「雨隠り」は雨の日に外出を控えることです。「俄雨」は急に降り出す雨、「通り雨」は一しきり降って直ぐに止む雨、「天

「氣雨」は日が照っているのに降る雨です。また「さめ」とも読むことがあります。「小雨（こさめ）」は小降りの雨、「春雨（はるさめ）」は春静かに降る雨、「霧雨（きりさめ）」は霧のように細かい雨、「氷雨（ひさめ）」は氷の交じる冷たい雨です。特別な読み方として、「時雨（しぐれ）」は秋から冬にかけて、降ったり止んだりする雨、「五月雨（さみだれ）」は、陰暦五月に降る長雨、現在の梅雨です。漢点字では、「𩇛𩇛𩇛」で表されます。この文字は、「雨冠」と呼ばれて多くの文字の上に位置して、天候や水に関わる文字を構成します。漢点字も同様に、「𩇛」の形で、「雨冠」を表します。

「雨季」 「雨天」 「雨中」 「雨後」 「雷雨」 「煙雨」 「細雨」
「降雨」 「豪雨」 「慈雨」 「甘雨」 「梅雨」 「雨具」 「雨傘」
「雨靴」 「雨戸」 「雨垂れ」 「雨音」 「雨宿り」 「雨隠り」
「俄雨」 「通り雨」 「天気雨」 「小雨」 「春雨」 「霧雨」
「氷雨」 「時雨」 「五月雨」

(35) 兩𩇛𩇛𩇛 リョウ ふた - つ

「雨𩇛𩇛𩇛」の近似文字です。馬車に二頭の馬を繋ぐ形で、馬車から伸びる長柄と、馬の頸にかける軛（くびき）を象った文字です。その二頭の馬から「二つ」という意味が生じ、馬が車を引くことから「車」を表す文字となりました。「二つで一組」という意味と、「車」あるいは「車」を数える単位の意味です。また古くから重さを表す単位にも用いられていて、わが国では江戸時代に、貨幣の単位である小判の一枚を「一兩」と呼びました。「リョウ」の音読の熟語では、「両方」は二つとも、「兩人」は二人の人、二人とも、「両親」は二親、父母、「両雄」は二人のライバル、「両手」は左右の手、「両眼」は左右の目、「両脇」は左右の脇、「両面」は左右あるいは表裏の面、「両輪」は左右の車輪、「両翼」は左右の翼と、「二つ、二つながら」の意味を表します。また貨幣では、「両替」は他国の通貨との交換や、有価証券と現金とを交換すること、車では、「車両」は人や物を運ぶ車のことです。漢点字では、「𩇛𩇛𩇛」で表されます。

「両方」 「兩人」 「両親」 「両雄」 「両手」 「両眼」 「両脇」
「両面」 「両輪」 「両翼」 「両替」 「車両」

(36) 士𩇛𩇛𩇛 シ

「士𩇛𩇛𩇛」の下に短い横線が付いた形の文字です。神様に捧げられるまさかり 鉞を象っています。王様のシンボルとして、刃を下にして置いた形と言われます。元は王様を守る戦士や兵士を意味しましたが、後に官吏、役人、裁判官

をも指すようになりました。わが国では「武士」の階級があつて、王朝時代から天皇家や貴族の周辺警護に当たっていました。鎌倉時代から政治の中心を担うようになり、江戸時代には、「士農工商」という固い身分制度が敷かれて、この文字は階級社会の最高位の武士階級を指しました。また古くから男子を指す語としても用いられました。熟語では「士女」は男と女、「紳士」は上流の男子、品格があつて礼儀に厚い男性です。「士官」は軍隊で兵卒を指揮する階級、「戦士、兵士」は指揮を受けて戦う階級です。「騎士」は中世ヨーロッパで活躍した騎馬の武士、「武士」はわが国の王朝を守護し、後に政権を担った階級です。「剣士」は剣術をする人、「棋士」は将棋や囲碁を戦わせる人、「力士」は相撲をとる人です。また、「弁護士、公認会計士、税理士」など、国家資格の有資格者を指す語としても用いられます。漢点字では、「𠄎𠄎𠄎」で表されます。形が「土𠄎𠄎」に類似していて、「土𠄎𠄎」は下の横線が長いのに対して、この文字は、上の横線が長いので、このような漢点字符号となりました。

「士女」 「紳士」 「士官」 「戦士」 「兵士」 「騎士」 「武士」
 「士農工商」 「剣士」 「棋士」 「力士」 「弁護士」
 「公認会計士」 「税理士」

※ 「しかばね冠」と「おい冠」

(37) 居𠄎𠄎𠄎 キョ い-る お-る

「しかばね冠」とその下に「古𠄎𠄎𠄎」が入った形の文字です。「しかばね冠」は、死者の葬送の時、「形代(かたしろ)」にその霊を移して送る風習があつて、その「形代」を象ったものと言われます。「古𠄎𠄎𠄎」は元は几(つくえ)で、「形代」をその上に置きました。後に「几」は「古𠄎𠄎𠄎」に替わつて、音を表すようになりました。訓読の「いる、おる」は、「人がいる、腰を据える」という意味です。「キョ」の音読の熟語では、「居宅」は何時も住んでいる家、「居室」は普段いる部屋、「居住」は一定の場所に住むこと、「住居」は人の住んでいるところ、住まいです。「いる、おる」の訓読では、「居間」は人が何時もいる部屋、「居住まい」は座っている姿勢、「居住まいを正す」、「居候」は他人の家に住んで、生活の面倒を見てもらうこと、「居座る」は座り込んで動かないことです。漢点字では、「𠄎𠄎𠄎」で表されます。「𠄎𠄎」は、「しかばね冠」として多くの文字に含まれます。

「居宅」 「居室」 「居住」 「住居」 「居間」 「居住まいを正す」
 「居候」 「居座る」

(38) 老 𠄎𠄎𠄎 ロウ お-いる ふ-ける

「おい冠」の下にカタカナの「ヒ」が置かれた形の文字です。「おい冠」は、髪が長く垂れた形、カタカナの「ヒ」は人の形で、この文字は髪を長く垂らした人を象っています。「おいる、ふける」とは、年を取って衰えること、身体が動かなくなったり、思考力が低下したりして、それまでと同じ生活が営めなくなることを行います。しかし「ロウ」にはそれに加えて、長く豊かな経験のあることや、そのような知識や経験を敬うという意味を含んでいます。「ロウ」の熟語では、「老成」は経験を積んで熟達すること、「老練」は経験を積んで慣れて巧みなこと、「老雄」は老いた英雄、「老獯」は世故に長けて狡猾なこと、悪賢いこと、「老婆心」は余計な心配をすること、自らの行為を謙遜して言う語、「老若男女」は老いも若きも・男も女も、みんなのことです。「老骨」は年老いた身体、「老骨に鞭打つ」とは、弱った身体を叱咤して働くことを行います。「老中」とは、江戸幕府の将軍の直下にあつて、政務を摂る役職、現在の総理大臣と、組閣する内閣に当たります。「年寄り」は、「村年寄り、町年寄り」と呼ばれて、地域の秩序を取り仕切る、平民の役職です。「元老」は、明治後期から昭和初期にかけて、天皇を補佐して、時の首相を推薦したり、重要な国務を遂行したりした政治家です。漢点字では、「𠄎𠄎𠄎」で表されます。「𠄎」は、「おい冠」を表します。

「老成」 「老練」 「老雄」 「老獯」 「老婆心」 「老若男女」
「老骨に鞭打つ」 「老中」 「元老」

(39) 考 𠄎𠄎𠄎 コウ かんが-える かんが-え

「老 𠄎𠄎𠄎」の近似文字です。「おい冠」の下に、「コウ」の音を表す符号、横線とその下に包み構え（このテキストにはまだ出ていません）が置かれた形の文字です。この文字の元の意味は「父」で、特に「亡き父」のことです。音の「コウ」が、「かんがえる、かんがえ」の意味の文字と共通していたために、現在ではその意味に用いられるようになりました。「コウ」の音の熟語では、「考案」は工夫をめぐらすこと、またよく考え調べること、「考査」は調査すること、あるいは試験のことです。「考察」はよく考えて明らかにすること、「考究」は考えを深く突き詰めることです。「再考」はもう一度考え直すこと、「思考」は考えることです。「考古学」は、遺跡や遺物によって、人類の歴史を研究する学問です。漢点字では、「𠄎𠄎𠄎」で表されます。

「老 𠄎𠄎𠄎」に元の意味も形も近いことによります。

「考案」 「考査」 「考察」 「考究」 「再考」 「思考」
「考古学」

♪♪ 歌

城ヶ島の雨

作詞 原白
作 梁貞

はふるふる 城ヶ島の磯に

利鼠の がふる

は 珠か夜 の霧か

それともわたしの忍び泣き

舟はゆくゆく通り矢のはなを

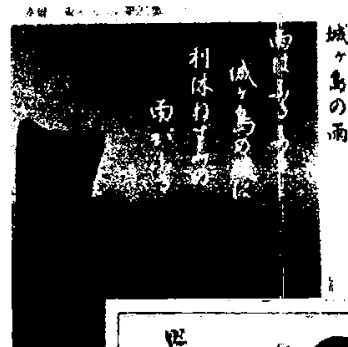
濡れて帆あげたぬしの舟

ええ 舟は櫓でやる 櫓は唄でやる

唄は船頭さんの 気

はふるふる はうす曇る

舟はゆくゆく帆がかすむ



※ 大正2年（1913年）白秋28歳、
城ヶ島の自宅（当時）での作。

読みの練習 (26)

- (1) 眠する物が多い。
- (2) わがに渡ってる。
- (3) に忘れないぞ。
- (4) 遠の理をう。
- (5) が薄い。
- (6) 深いだ。
- (7) 眈眈と狙う。
- (8) 刈りで恥ずかしいよ。
- (9) 海山という山がある。
- (10) 空をべないもいる。

- (11) まだ知られていない深海。
- (12) 足の裏にのがた。
- (13) の骨までべたよ。
- (14) のの刻は後からの。
- (15) のすきやきはき。
- (16) のよだれというとく長いことをう。
- (17) の知らせ。
- (18) 支の番は。
- (19) 胎児はので育つ。
- (20) のようにしい。

- (21) 汗はいかが。
- (22) のを用にする。
- (23) は物のに似せている。
- (24) を交通段にする々々。
- (25) 松島をった盆栽。
- (26) 深い溪。
- (27) の。
- (28) 地はなどの湿地でアイヌだって。
- (29) が少ないと節制になる。
- (30) 決です。

- (31) 傘も靴も用いた。
- (32) のの位にある。
- (33) 養の資格をつ。
- (34) 親代同は当たり前だった。
- (35) か前からこの地区にましたよ。
- (36) わしにはにかってる。
- (37) いてはに従え。
- (38) して後を過ごしたいものだ。
- (39) 齢よりけてえる。
- (40) をす。
- (41) しっかり推しなさい。
- (42) そのえは甘いよ。
- (43) を笑わせることばかりえている。

* * * * *

書き取り題 (26)

- (1) どうじはひるがもつともみじかい。
- (2) ふゆやまのとざんはばんぜんのちゅういを。
- (3) じきゅうせんにつよい。
- (4) ひさしぶりにあう。
- (5) はんざいをふせごう。
- (6) つみなことをいうなあ。
- (7) こけつにいらずんば…。
- (8) このほんはわたしのとらのまきです。
- (9) にほんのこくちょうってしててますか。
- (10) とりかごのなかにさんばいる。
- (11) たんすいぎよのなかまです。
- (12) いせいのいいうおいちば。
- (13) さかなにはかんしょうようとしょくようがあるね。

- (14) とりはじゅうにしのじゅうばんめにでてくる。
(15) ぎゅうにゆうはからだによいしょくひんでしょ。
(16) うしにひかれてぜんこうじまいり。
(17) ごぜんとごご。
(18) うまのこくはごぜんじゅういちじからごごいちじごろ。
(19) ようもうをげんりょうとするウール。
(20) ひつじかいのしょうねん。
- (21) とんしゃにぶたがいる。
(22) ぶたにしんじゅのたとえ。
(23) いんしょうがよいひとですね。
(24) ぞうはながいはなをもつ。
(25) もとになるものをかたどる。
(26) しんざんゆうこく。
(27) たにまにじんかがみえる。
(28) へいちにつきでたおかにはさまれたとちがやと。
(29) あめふれば、じかたまる。
(30) よるはらいうになるそうだ。
- (31) あまおとをきく。
(32) もうりょうてりょうあしがじゅうにうごくよ。
(33) ぶしのしきがおおいにあがった。
(34) てんきよしてしんきよのしらせをだす。
(35) ここにずっといぬがいるよ。
(36) あっちにたっておれ。
(37) むかし、ろうじゅうとかたいろうというやくがあった。
(38) ほかのひとよりふけているかな。
(39) ねんれいをこうりよしましょう。
(40) しこうりよくがおちた。
- (41) こうこがくをこころざす。
(42) とうきよくのかんがえをただす。
(43) ひとのたちばをかんがえよう。

* * * * *

9 基本文字 (5)

3. 第二基本文字 (3)

(40) 冷 𠄎𠄎 ㄌㄟ ㄌㄧㄡ つめ-たい ひ-える ひ-やす
さ-める さ-ます ひ-ややか

「にすい」の右側に「冷 𠄎𠄎」が置かれた形の文字です。「にすい」は、氷を切り出した時の切り口の模様を象っていて、「こおり、つめたい、ひえる」という意味を表します。つくりの「冷 𠄎𠄎」は、音符として「レイ」の音を表します。訓読の「つめたい」は、氷の冷たさに由来して、「ひえる、ひやす」は、冷たさで冷える、冷たいもので冷やす、寒さで冷え込むという意味です。「さめる、さます」は、熱いもの、暖かいものの温度が下がることです。「レイ」の音読の熟語では、「冷雨」は冷たい雨、「冷氣」は冷たい空気、寒い風、「冷却」は冷たく冷やすこと、「冷房」は空気を冷やして暑さを凌ぐこと、「冷静」は落ち着いていて物事にあわてないことです。「冷淡」はあっさりしていること、熱心でないこと、思いやりがないこと、「冷遇」は低く扱われること、冷たくあしらわれること、「冷眼」は冷ややかな目つき、と「つめたい、ひややか」の意味を表します。「冷酒」は、「レイシュ」と読めば冷やした酒、「ひやざけ」と読めば爛をしない酒、「冷水」は冷たい水、「冷水を浴びせられる」と使われます。「ひえる、ひやす」の訓読では、「冷え冷え」は冷えること、冷たいこと、心が空しいこと、「冷え性」は冷えやすい体質、「冷や」は冷たい水、「コップ一杯のお冷や」、「年寄りの冷や水」とは、老人が若者の真似をして失敗すること、「冷や汗」はひどく恥ずかしい思いをした時にかく汗です。「冷やかす」とは、からかったり辱めること、買う気がないのに売り物を見たり値を聞いたりすることです。「ひやり」とは、冷たさを感じたり恐怖を感じたりする時の間投詞です。漢点字では、「𠄎𠄎」で表されま
す。「𠄎」は「第二さんずい」として用いられるとともに、「にすい」として、「氷、冷たい」の意味を表す文字に含まれます。

「冷雨」 「冷氣」 「冷却」 「冷房」 「冷静」 「冷淡」 「冷遇」
「冷眼」 「冷酒」 「冷水」 「冷え冷え」 「冷え性」
「コップ一杯のお冷や」 「年寄りの冷や水」 「冷や汗」 「冷やかす」

(41) 衣 𠄎𠄎 イ エ ころも きぬ

身体にまとった衣服の形を象った文字です。人の頭と前の合わせ、そして裾の広がり象っています。訓読の「ころも」は、身にまとう衣服、とりわけ僧侶が身に付ける衣服を言います。また外側を覆って中身を保護する膜、

天麩羅やお菓子の表面を覆う薄い膜も言います。「きぬ」も同様に衣服のことです。とりわけ平安時代の装束を言います。音読の「イ」は衣服一般に、「エ」は、主に仏道修行に関わる人たちが着るものを言います。熟語では、「衣服」は身にまとうもの、着物、「衣装」は着物、衣服。また、舞台上で着る衣服。「衣食」は衣服と食物、生活に欠かせないもの、生活をする事、「衣食足りて礼節を知る」とは、人は生活の安定を得て、初めて道徳的になれると言う意味です。「衣帯」は衣服と帯、衣服を着、帯を締めること、「衣冠束帯」は平安時代の公家の正装、最も格式張った正装です。「衣紋」は衣服の着こなしや仕立て、「衣紋掛け」は脱いだ衣服を掛ける道具、「衣桁」は脱いだ衣服を掛ける台です。「白衣」は、「ハクイ」と読めば白色の衣服、医師・看護師・調理師など保健・衛生に関わる人の着る衣服、「ビャクエ」と読めば、僧侶に対して一般人の着る衣服を言います。「黒衣」は、「コクイ」と読めば黒色の衣服、喪服、「コクエ」と読めば墨染めの衣、僧侶の着る衣服です。「短衣」は短い衣服、「長衣」は長い衣服です。「粗衣」は粗末な衣服、「粗衣粗食」とは粗末な衣服と粗末な食事という意味です。「僧衣」は僧侶の衣服、「作務衣」は、禅宗の僧侶の修行、農作業や掃除の時に着る、上下に分かれる衣服です。「きぬ」の訓読は、平安時代に用いられた熟語が多くあります。「狩衣（かりぎぬ）」は公家の略装、「唐衣（からぎぬ）」は婦人の礼服です。また「濡れ衣（ぬれぎぬ）」とは、言われのない嫌疑や噂を立てられることです。またこの文字には、「き-る、よ-る」の訓読もあります。漢点字では、「𠄎𠄎」で表されます。「𠄎」で、「衣偏」を表します。

「衣服」 「衣装」 「衣食足りて礼節を知る」 「衣帯」 「衣冠束帯」
「衣紋掛け」 「衣桁」 「白衣」 「黒衣」 「短衣」 「長衣」
「粗衣粗食」 「僧衣」 「作務衣」 「狩衣」 「唐衣」 「濡れ衣」

- * 「𠄎」は、既に「示偏」を表すことをご紹介しました。墨字でも「示偏」と「衣偏」はカタカナの「ネ」によく似た形です。漢点字でも「ネ」に当たる「𠄎」を「示偏、衣偏」として使用することになりました。

(42) 米 𠄎𠄎 ベイ マイ こめ よね メートル

「十𠄎」の四隅に一つずつ点を置いた形の文字です。稲の実、「こめ」の実った形を象っています。「禾𠄎𠄎(ノ木)」は稲の穂を表していますし、この文字は稲の実りを表します。「よね」は「こめ」の古い言い方です。「こめ」ばかりでなく、広く他の穀物も指しました。わが国の食生活は、米を中心に行われました。明治維新前の経済は、この米を中心に動いていて、武士階級の俸給は米で支払われました。それを貨幣に両替して消費に当てました。

このような経済制度を「米本位制」と呼びます。「ベイ、マイ」の音読の熟語では、「米価」は米の価格、米の値段、「米穀」は米、穀類の総称、「米作」は米を作ること、稲作です。「米寿」は八十八歳、米の字を分解すると八十八となることから言います。「米飯」は米の飯、「玄米（げんまい）」は粳穀を取り去っただけで、まだ精白していない米、「精米（せいまい）」は玄米を搗いて白くすること、「白米（はくまい）」は精米して白くなった米です。また「ベイ」の音は、アメリカ合衆国、あるいは南北アメリカ大陸を指す語として用いられます。アメリカを漢字で、「亜米利加」と表記するところに由来しています。また長さの「メートル」を表す記号としても用いられます。漢点字では、「𠄎𠄎𠄎」で表されます。「𠄎」は、「ノ木偏」と「米偏」を表します。

「米価」 「米穀」 「米作」 「米寿」 「米飯」 「玄米」 「精米」
 「白米」 「亜米利加」 「米本位制」 「長さ10米」
 「面積3.3平方米」 「体積1立方米」

* 「米𠄎𠄎」の形、「十𠄎」の四隅に点を置いた形は、他の文字「齒、菊、隣」などにも含まれます。これらは「こめ」には関わりませんが、細かなものが集まったり、外へ開いたりする形を表しています。

※ 「延繞、支𠄎𠄎、第二進繞」

(43) 延𠄎𠄎 エン の-びる の-べる の-ばす の-べ

「えんによろ」の右側にカタカナの「ノ」の下に「止𠄎」が置かれた形の文字です。「えんによろ」は長く延びる形を表しています。訓読の「のびる、のばす」とは、空間的にも時間的にも、長く延びる、引き延ばすという意味を表します。「エン」の音読の熟語では、「延期」は予定の期日を後に延ばすこと、「延寿、延年」は寿命を延ばすことです。「延着」は予定の時刻や期限を守れずに遅れて着くこと、「遅延」は遅れて時間が延びること、長引くこと、「延長」は時間が延びること、延ばすこと、「延納」は納期を先へ延ばすことです。「延び広がる」という意味から、「蔓延」は伝染病などが広がって中々収まらないこと、「はびこる」とも訓読して、草木が勢いを増して、盛んに延びて茂ることをも表します。「のばす、のべる」と訓読する熟語では、「引き延ばす」は引っ張って長くする、遅らせる、「繰り延べる」は一時的に期間を延長することです。「のべ」の入った熟語では、「延べ板、延べ金、延べ棒」は金属を板状に延ばしたもの、「日延べ」は先へ延期すること、「延べ払い」は代金を直ぐに払わないで、期限を先に置いて払うこと、「延べ買い、延べ売り」と用いられます。また「延べ面積」は建物の階数の面積を合算した面積、「延べ人数」は何人が何日かかけて行った仕事を一日で行ったものとして

計算した人数、「延べ日数」は何人が何日かかけて行った仕事を、一人で行ったものとして計算した日数です。さらにこの文字には“ひ-く、は-う”の訓読もあって、「延客（えんきゃく）」は客を引くこと、「延縄（はえなわ）」は釣り糸に沢山の針を付けて魚を捕る漁法です。漢点字では、「𠄎𠄎𠄎」で表されます。「𠄎𠄎」は、「えんによろ」を表します。「𠄎𠄎」は既に、「そうによろ」を表す符号としてご紹介しました。

「延期」 「延寿」 「延年」 「延着」 「遅延」 「延長」 「延納」
 「蔓延」 「引き延ばす」 「繰り延べる」 「延べ板」 「延べ金」
 「延べ棒」 「日延べ」 「延べ払い」 「延べ買い」 「延べ売り」
 「延べ面積」 「延べ人数」 「延べ日数」 「延客」 「延縄」

(44) 支𠄎𠄎𠄎 シ ささ-え ささ-える つか-える えだ

「十𠄎𠄎」の下に「又」（このテキストではまだ出ていません）が置かれた形の文字です。「十𠄎𠄎」は折った木の枝の形、「又」は手の形を表して、木の枝を手で持った形を象っている文字です。“えだ”という訓読は、この文字の意味に由来しています。ただし“えだ”と読む文字はこれに木偏を加えた文字が当てられていて、この文字を“えだ”と読むことはあまりありません。この“えだ”の意味は、木の枝を折って作った棒で支え棒をすることから、“ささえる”の訓読を導きました。

またそこから、先へ進まないという意味の“つかえる”という訓読が生じました。さらに常用漢字にはありませんが、枝が枝分かれするところから“わける、わかっ”と訓読することもあります。“シ”の音読を含む熟語では、「支給」は割り当てて、お金や物を渡すこと、「支点」はてこなどを支える固定した点、「支援」は援助すること、手を差し伸べて助けることです。“えだ”の意味で、「支流」は本流に流れ込んでいる川、枝川、「支店、支社」は、店や会社が大きくなって規模が広がると、離れた所に拠点を置きます。そのような店や事務所のことです。それに対して中心となる店や社屋を「本店、本社」と言います。「支離」は分かれてばらばらになること、「支離滅裂」とはめちゃくちゃなことです。既にご紹介しましたが、古い中国の時間や方角の基準に、「十干十二支」があって、ここにも「支」が使われます。この「干」は「幹」、「支」は「枝」のことです。漢点字では、「𠄎𠄎𠄎」で表されます。この文字は、多くつくり用に用いられます。

「支給」 「支点」 「支援」 「支流」 「支店」 「支社」
 「支離滅裂」 「十干十二支」 「支え棒」

(45) 遊_レ ユウ ユ あそ-ぶ あそ-ばせる

しんによりの右側に、吹き流しが棚引く様子を象った形が置かれた文字です。しんによりは人が先へ進む様子、動きのある様子を表します。つくりの形は、ゆらゆらと揺らめく様子を表しています。元は神様があちこちを巡り動くことを意味した文字でしたが、のちに人の行動を表すようになりました。訓読の「あそぶ」とは、日常から離れて楽しみに身を委ねることで、当初は神様の前で、歌を歌ったり舞を舞ったりすることを意味しました。そこから広がって、酒食や賭博に耽ったりすることを言うようになりました。遠出をして野山を散策したり、風景を楽しむという健康的な遊びもあります。子どもが無心に動き回る様子、鳥や魚が動き回る様子も「あそぶ」と言います。また仕事が無く暇なこと、お金や道具、土地などが利用されずにいることも「あそぶ」と言います。「ユウ、ユ」の音読を含む熟語では、「遊戯」は遊び戯れること、幼稚園や小学校で行う簡単な遊びや踊り、「遊興」は面白く遊ぶこと、「遊楽」は遊び楽しむことです。「遊泳」は海水浴などで泳ぐこと、泳ぎを楽しむこと、「遊泳禁止」の海岸もあります。「游学」は故郷を出て他国で学問すること、「遊覧」は遊びながら見物して回ること、「遊山」は山野に遊びに出かけること、「遊行」は「ユウコウ」と読んで出歩くこと、遊び歩くこと、「ユギョウ」と読んで、僧侶が修行のために諸国を巡ること、「行脚」することです。「交遊」は友人などと付き合うこと、「豪遊」は豪勢に遊ぶこと、大尽遊びをすること、「外遊」は海外旅行をすることです。「あそび」が前後に付いた複合語が沢山あります。「遊び心、遊び好き、遊び金」、「石蹴り遊び、ごっこ遊び、ままごと遊び」。言葉の最後に「あそばせ」を付ける言葉遣いを「遊ばせ言葉」と言って、「ご免遊ばせ」、「ご覧遊ばせ」などと用いられます。漢点字では、「遊_レ」で表されます。「遊_レ」は、「遊_レ」とともに二つ目のしんによろとして用いられます。

「遊戯」 「遊興」 「遊楽」 「遊泳」 「游学」 「遊覧」 「遊山」
「遊行」 「交遊」 「豪遊」 「外遊」 「遊び心」 「遊び好き」
「遊び金」 「石蹴り遊び」 「ごっこ遊び」 「ままごと遊び」

- * 「遊_レ」の漢点字符号は、「走_レ」（そうによろ）、延_レ（えんによろ）、支_レ（しんによろ）、遊_レ（しんによろ）」を表します。これまでに他に「母_レ」もご紹介しました。

(46) 熱_レ ネット あつ-い

このテキストで既にご紹介している「芸_レ」の旧字体に含まれているものと同じ形、縦に「土・八・土」が並んで、その右側に「丸_レ」が置かれ

た形と、その下に「烈火」である四つ点が置かれた形の文字です。上の部分は、土に熱が籠もってエネルギーが充満して、草木が芽生える様子を象っています。気候が温暖で生命力が充実した状態を表しています。下の「烈火」は後から付いた形で、火が燃えている様子、下から火で熱している様子を表します。このように元は、温暖で生命力に富んでいることを表した文字でしたが、のちに下から火で熱したように熱い状態を表すようになりました。訓読の「あつい」は気温や体温が著しく高い状態、あるいはそれに近付いたり触れたりして熱く感じることです。この反対語は「冷たい」です。「あつい」の訓読は、激しく強いという意味で、「熱い思い」、「熱い視線」と用いられたり、「あつくなる」と使って、物事に熱中する、感情が昂ぶる、怒りで激するなど用いられます。「ネツ」の音読では、「熱する」とは下から火を焚いて急速に温度を上げること、あるいは感情が激したり熱中したりすることです。熟語では、「熱心」は一つの物事に打ち込むこと、一心に行うこと、「熱意」はそのような気持ち、「熱中」は一つの物事に精神を集中すること、「熱烈」は感情が昂ぶって激しいことです。「熱気」は熱い空気、あるいは興奮している雰囲気、「熱湯」は煮え立っている湯、沸騰している湯、「熱風」は高温の風、夏の熱い風、「灼熱」は焼けるように熱いこと、あるいは物事に熱中していること、「発熱」は物が高い熱を出すこと、あるいは体温が普通以上に高くなることです。漢点字では、「𠄎𠄎𠄎」で表されます。

「熱心」 「熱意」 「熱中」 「熱烈」 「熱気」 「熱湯」 「熱風」
「灼熱」 「発熱」

※ 「舟𠄎𠄎」とその近似文字「丹𠄎𠄎」

(47) 舟𠄎𠄎 シュウ ふね ふな

丸木舟の形を象った文字です。大昔の舟は、現在のように、板を貼り合わせて作られるものではありませんでした。大きな木を削り抜いて作る、丸木舟でした。この丸木舟は、水上の運搬用としてばかりでなく、物を受け渡しする時の容器として用いられたり、食物を盛る大皿としても用いられました。そこでこの文字を含む文字には、「皿、盥」の意味を表す文字があります。訓読の「ふね」は、水上を輸送するための乗り物を、また桶のような容器、舟の形をした容器などを指します。複合語を作る時には、しばしば「ふな」と読まれます。「シュウ」の音読を含む熟語では、「舟運」は舟による貨物の運送、「舟行、舟航」は舟に乗って行くこと、「舟車」は舟と車です。「舟船」はふね、両方ともに「ふね」と訓読される文字です。「舟艇」は小型の舟、「孤舟」は水に浮かぶ一隻の小舟です。漢点字では、「𠄎𠄎𠄎」で表されます。「𠄎𠄎」は、「舟偏」として、舟に関する文字を構成します。またこの文字は、略体化

されて「月_☾」の形になって、多くの文字の構成要素となります。このテキストでは、「舟月（ふなづき）」と呼びます。

「舟運」 「舟行」 「舟航」 「舟車」 「舟船」 「舟艇」 「孤舟」
「舟月」

(48) 丹_☾ タン に あか

「舟_☾」の近似文字です。赤い土を採取する井戸の形を象った文字です。中国ではこの井戸から、硫黄と水銀の化合物の丹砂（赤い土）を取りました。この赤い土は、絵の具の材料や水銀を取る原料として珍重されました。またこの赤い色は、長生きの薬と考えられていて、薬を意味する語にも使われています。訓読の「に_☾」は、この赤い土で色付けした色で、「丹塗り」と呼ばれます。わが国の歴史書である「古事記」には、この「丹塗り」の矢が神様の化身として登場します。また「万葉集」に、「青丹よし奈良の都は咲く花のほふがごとく今盛りなり」という歌があります。この「青丹よし（あおによし）」は、「奈良の都」の枕詞です。「タン_☾」の音読では、赤の色を意味して、「丹頂鶴」は頭の天辺が赤い鶴です。また錬った薬を意味する語に使われて、「万金丹」は気付け・解毒に効く薬です。「丹心、丹精、丹念」は、「真心」を意味します。旧国名の「丹波」と「丹後」の国を表す語としても用いられます。漢点字では、「_☾」で表されます。

「丹頂鶴」 「万金丹」 「丹心」 「丹精」 「丹念」 「丹波」
「丹後」 「丹塗り」 「青丹よし」

※ 「王_☾、将_☾、主_☾」

(49) 王_☾ オウ きみ

王様の象徴である柄を外した「^{まさかり}鉞」の、刃を下に向けて置いた形を象った文字です。王様は、一つの国を統治しなければなりません。それには絶大な権力が必要ですが、それとともに「徳」を備えていなければなりません。道徳によって国を営むのが王様で、そのしるしが「鉞」です。先にご紹介した「士_☾」も、この「鉞」を象った文字ですが、儀式用の小型のものと言います。訓読の「きみ_☾」は、「君_☾」に用いられることが多く、普通この文字は、「オウ_☾」と音読されます。秦の始皇帝が統一するまでは、中国は沢山の国に分かれていました。その国々を治めていたのが王様です。始皇帝はその国々を一つにしたところから、王様より一つ高い「皇帝」の位に就きました。「オウ_☾」の音読の含まれる熟語では、「王位」は国王の位、「王家、王室」は国王の一族、「王国」は王様が支配する国、「王朝」は同じ王家に属する王

様が支配している時期のことです。「王道」は武力によらず、道德によって政治を行う仕方、「王命」は王様の命令、「帝王」は一国の君主、最高位の国王です。「王将」は、将棋の中心に位置する駒で、双方が相手の王将を取り合って、勝負を決します。語の後ろに“オウ、”が付くと、その道の第一人者を意味します。「ホームラン王、発明王、百獣の王ライオン」などと用いられます。漢点字では、「𠄎𠄎𠄎」で表されます。他の文字の構成要素となる時は、「玉𠄎」の略体として用いられます。

「国王」 「王位」 「王家」 「王室」 「王国」 「王朝」 「王道」
 「王命」 「帝王」 「王将」 「ホームラン王」 「発明王」
 「百獣の王ライオン」

(50) 将𠄎𠄎𠄎 ショウ ひき-いる おこな-う まさ-に

机のような台の上に、供物の肉を、手で持って捧げる形を象った文字です。神様に、戦勝を祈願する形です。通常は“ショウ、”の音読が用いられますが、ここにご紹介する訓読も、この文字の意味を表します。“ひきいる、おこなう、”とは、軍隊を指揮して、勝利に導くことです。この文字は、そのような指揮官を意味します。軍隊の指揮官は、一国の運命を担って戦いに臨みます。そこで神様に戦勝のお祈りを捧げます。“ショウ、”の音読を含む熟語では、「將軍」は軍隊の最高指揮官です。わが国の歴史では、源頼朝が幕府を開いてのち、武家の統領が治める幕府の最高位の役職を言うようになりました。「大将」も軍隊の最高指揮官、「将校」は兵士を率いる指揮官、「将士、将兵」はその将校と兵士、「将帥」は將軍、軍隊の最高位の指揮官、「名将」は優れた大将です。訓読に“まさに、”という読みがあります。漢文訓読では、「まさに…せんとす」、「まさに…ならんとす」と読み下します。「将来」は「まさに来らんとす」と読み下すことができ、これから先、未来を指します。またここにはありませんが、“もつ、もって、”という訓読もあります。「将来する」とは持って来るという意味です。また他に“…はた…、…と…”という訓読もありますが、現代文では用いられません。漢点字では、「𠄎𠄎𠄎」で表されます。「𠄎」は、「月偏」と呼ばれる部首を表します。机や寝台のような台を意味する部首です。

「將軍」 「大将」 「将校」 「将士」 「将兵」 「将帥」 「名将」
 「将来」

* テキスト第三巻でご紹介した「片𠄎𠄎𠄎」は、「出𠄎𠄎𠄎」の近似文字と位置付けましたが、向きがこの「月偏」と反対を向いています。従って、「出𠄎𠄎𠄎」の近似文字ではなく、この「将𠄎𠄎𠄎」の近似文字と捉える

のが妥当です。

(51) 主 𠄎 𠄎 シュ ぬし あるじ おも
おも - な おも - に

「主 𠄎 𠄎」の上に、点の一つ置いた形の文字です。上の点は灯火の象形です。灯明を台の上に灯している形です。昔の人は、火を最も神聖なものと考えていました。この文字は、その火を持つ人を表しています。火を持つ人とは、氏族を治める人、長でした。「ぬし」は家や土地の所有者、あるいは主催者です。「大国主命」は、「古事記」などに現れる、出雲神話の神様です。また古くは相手を「ぬし」と呼んで、尊敬したり、親しみを込めたりしました。「あるじ」は、一家の主人、使用人の主人、または客に対して持てなす立場の人のことです。「おも、おもな、おもに」の訓読は、中心となるものという意味です。「主家（おもや）」は建物の中央、または住居に用いる部分です。音読の「シュ」も、氏族の中心という意味から、物事の中心、主要なものを表します。熟語では、「主人」は家のあるじ、また、雇い主、「主君」は自分の仕えるあるじ、「君主」は国家の統率者です。「領主」は領地のあるじ、「主将」は軍の総大将、あるいはチームのキャプテンです。「主催」は中心となって行うこと、そういう団体や人、「主要」は主だっていて重要なこと、「主任」はその任務を主として担当すること、「主席」は第一位の座、あるいは政府の最高責任者を意味します。キリスト教では「シュ」と読んで、キリスト、あるいは神様の意味で用います。漢点字では、「𠄎 𠄎」で表されます。漢字のパーツには、この文字の元の形、「主 𠄎 𠄎」の縦の線が、上へ突き抜けた形がしばしばあります。この形も漢点字では、「𠄎」で表されます。この文字が漢字の構成要素となる時は、他のパーツと組んで、色々な場所を占めます。

「主人」 「主君」 「君主」 「領主」 「主将」 「主催」 「主要」
「主任」 「主席」 「大国主命」 「主家」

※ 「夕 𠄎 𠄎、死 𠄎 𠄎」

(52) 夕 𠄎 𠄎 セキ ゆう

夕方月の形を象った文字です。カタカナの夕の形によく似ています。「朝 𠄎 𠄎」の文字は残った月と昇り始めた太陽を表していますが、この文字は、東の空に昇る月を表しています。「月 𠄎」は中に点が二つ、この文字は一つです。太陽は「日 𠄎」、丸い形を象っています。「月 𠄎」とこの文字は、三日月の形を象って、形の上で「日 𠄎」と区別されます。訓読の「ゆう」は、日が暮れかけて夜になろうとするころを意味して、含まれる熟語が沢山あり

ます。「夕方」は日の暮れ方、「夕べ」は日が暮れて夜が始まろうとするころ、あるいは昨夜、また夕方から始まる催し物、「夕暮れ」は日の暮れ時、黄昏時、「夕間暮れ」は夕方薄暗くてよく見えないことです。「夕日」は夕方の太陽、入り日、「夕焼け」は、日没の際、地平線が赤色に染まる現象、「夕明り」は夕方に残るほのかな明るさ、残照、「夕闇」は夕方の暗さです。「夕空」は夕方の空、暮れ泥む春の夕空、「夕立」は夏の夕方、急に激しく降り出す大粒の雨、または夕方吹き出す風、夕方荒れ出す波、「夕涼み」は夏の夕方、縁側などに出て涼むことです。「夕潮、夕汐」は、夕方満ちて来る、あるいは引いて行く潮、「夕星（ゆうずつ）」は、夕方西の空に見える金星、宵の明星、「夕月」は秋の夕方見える月です。「夕食、夕餉（ゆうげ）」は夕方の食事、晩飯、「夕顔」は夕方花を開いて朝萎む、瓜科の植物です。実は干瓢として食用になります。「セキ」の音読の熟語では、「夕照」は夕焼け、「今夕」は今夜。今晚、「朝夕」は朝と夕方、毎日です。「一朝一夕」とは、朝と晩、ほんの短い時日、…には行かない、と否定的に用いられる語です。漢点字では、「𠄎𠄎𠄎」で表れます。

「夕照」 「今夕」 「朝夕」 「一朝一夕」 「夕方」 「夕べ」
「夕暮れ」 「夕間暮れ」 「夕日」 「夕焼け」 「夕明り」 「夕闇」
「夕空」 「夕立」 「夕涼み」 「夕潮」 「夕汐」 「夕星」
「夕月」 「夕食」 「夕餉」 「夕顔」

(53) 死𠄎𠄎𠄎 シ し-ぬ

「歹偏」の右側にカタカナの「ヒ」に似た形が置かれた文字です。「歹偏」は死んだ人の骨を象った形、つくりのカタカナの「ヒ」に似た形は、人の姿を現しています。人が死ぬこと、生命のあるものから命が抜け去ること、機能を果たさなくなること、活動を停止すること、役に立たなくなることの意味する語に用いられます。「必死の思い」とは、死んでもよいほどの思い、これだけは成し遂げたいという思い、「決死の覚悟」とは、死を覚悟して事にあたることを言います。漢点字では、「𠄎𠄎𠄎」で表されます。「𠄎」は、「歹偏」として用いられて、死や死者を表す文字を構成します。

「必死」 「決死」

(54) 立𠄎𠄎𠄎 リツ リュウ た-つ た-てる リットル

元は「大𠄎𠄎𠄎」の下に漢数字の一が置かれた形の文字で、時代が進むに従って現在の形になりました。「大𠄎𠄎𠄎」は人が両手を広げて立っている形、漢数字の一は、その場所を表していて、人が定まった位置に立っていることを

表します。人が定まった場所において、そこにいることを他の人に知らせることを意味する文字です。人に知らせるには、自らを目立たせなければなりません。目立つには横たえたり座ったりしている姿勢から、身体を起き上がらせます。訓読の“たつ”は、そのような行為を言います。人の立ち上がることから、物事が上へ上がることも“たつ”と言います。そこからさらに、明らかになる、現れる、知れ渡るという意味に用いられます。「霧、雲、湯気」が“たつ”、「煙、風、波、ほこり」が“たつ”、「気が立つ、腹が立つ、顔を立てる、役に立つ、見通しが立つ、暮らしが立つ、筆が立つ、弁が立つ、噂が立つ、戸を立てる、鳥が飛び立つ、足の立つ所で泳ぐ」などと用いられます。音読の“リツ、リュウ”は、「たつ、たてる」、あるいは「なりたつ、なりたたせる」という意味の熟語を作ります。「立案」は案を立てること、計画を立てること、「立脚」は立場や拠り所を定めること、「立身」は社会に出て、自分の地歩を確立すること、一人前になること、「立身出世」とは、世に用いられて栄達すること、世の中で成功することです。「立地」は植物の生育する上での一定の環境、または産業を営む場所を選択することです。「立派」は流派を立てること、また美しいこと、見事なこと、文句のつけようのないこと、「立法」は法律を制定することです。「立体」は三次元の空間を占める物体、「立像」は立っている姿の像、「立論」は議論の趣旨・順序を組み立てること、「立錐」は錐を立てること、「立錐の余地もない」とは、錐を立てるほどの隙間もない、極めて混み合っていることです。「立春、立夏、立秋、立冬」とは、二十四節気の一つ、春・夏・秋・冬が始まる日を言う語で、季節は三カ月ごとに変化します。“リツ”が後ろに来る熟語では、「起立」は立ち上がること、「直立」は真っ直ぐに立つこと、「独立」はそれだけの力で立っていること、個人が一家を構えること、「自立」は援助を受けずに、自分の力で身を立てること、独り立ちすることです。「設立」は法人などの組織を新たに設けること、「創立」は初めて設立すること、「確立」は制度などをしっかりと打ち立てること、「樹立」は物事がしっかりと立つこと、立てること、「成立」は成り立つこと、取り決めなどがまとまることです。「国立」は国が、「公立」は公共団体が、維持・運営すること、「県立、市立、町立、村立」などがあります。「私立」は私人がその費用で運営・維持することで、何れも学校や病院があります。「立方」とは、同じ数を三つ掛け合わせることで、三乗のことです。そこから長さの単位に対して、体積の単位の語として用いられて、「立方米」は“リップウメートル”と読まれます。それを短縮して「立米」と書いて“リュウベイ”と読んでいます。単位ではもう一つ、やはり体積の単位として“リットル”を表します。「1立、100立」と表記します。“たつ”の訓読では注意が必要です。身体を起こすことを“たつ”という場合、「起^レ立^ル」が、また動き始めること、出発することを“たつ”という場合は、「発^レ立^ル」が、さらに建物を建てることを“たつ”という場合は、「建^レ立^ル」が、

加えて時間や月日が過ぎることを“たつ”という場合は、「経」が用いられます。このうち後者二つは、まだご紹介していません。漢点字では、「𠄎」で表されます。

「立案」 「立脚」 「立身出世」 「立地」 「立派」 「立法」
「立体」 「立像」 「立論」 「立錐の余地もない」 「立春」
「立夏」 「立秋」 「立冬」 「起立」 「直立」 「独立」 「自立」
「設立」 「創立」 「確立」 「樹立」 「成立」 「国立」 「公立」
「県立」 「市立」 「町立」 「村立」 「私立」 「立方米」
「立米」 「気が立つ」 「腹が立つ」 「顔を立てる」 「役に立つ」
「見通しが立つ」 「暮らしが立つ」 「筆が立つ」 「弁が立つ」
「噂が立つ」 「戸を立てる」 「鳥が飛び立つ」 「足の立つ所で泳ぐ」

* 「𠄎」の点字符号で表される漢点字符号は、「石」
に、今回の「立」が加わりました。この文字は漢字のあらゆる箇所に位置を占める、大事なパーツです。

※ 「身、足」

(55) 身 シン み

身籠もった女性の姿を横から見た形を象った文字です。現在では「からだ」を意味する文字として用いられています。訓読の“み”は、「からだ」の意味から自分自身のことを、また皮や骨に対して肉や内臓を、さらに意味を広げて竹や木の内部を、刀の鞘に対して刃を、蓋のある容器の物を入れる部分を、外側から見て内側、内側にあるもの、物の中心、物事の本質を指す語として用いられます。「相手の身になる」とは相手の立場を考慮すること、相手に成り代わって考えてみること、「身分」とは社会関係の序列、江戸時代には「士農工商」という身分制度がありました。現在「身分証明書」と言えば、官庁の職員であったり学生であることを証明するものです。「身の上」とは人の一身に関する事柄、人の一生、運命、「身の丈」は身の高さ、背丈、身長、「身の丈に合わない」とは、力に余ることを、それと気づかないで行うことです。「身元」は出所、素性、一身上の関係、「身を起こす」は立身出世すること、「身を固める」はしっかりと身繕いする、身持ちをよくする、定職に就く、結婚するなどを意味します。「身重」は妊娠していること、「身軽」は子を産み落としてからだが軽くなること、また足手まといがなく行動が楽にできることです。“シン”の音読を含む熟語も、肉体、社会的関係、物の中にあるものを指す語を作ります。「身体」はからだ、肉体、「自身」は自分、自ら、語の後ろについてそれ自体と、強調を表します。「修身」は行いを正し、身を修め

整えること、「身代」は家の財産、身分、地位、「刀身」は鞘に収まった刀の刃です。「身辺」は身の回り、「身命」は体と命、「全身」はからだ全体、「單身」はただ一人のことです。「独身」は一人であること、配偶者がいないこと、「変身」は姿を変えること、変えた姿、「文身」は身体にほりものをする事、入れ墨です。漢点字では、「𠄎𠄎𠄎」で表されます。

「身体」 「自身」 「修身」 「身代」 「刀身」 「身辺」 「身命」
 「全身」 「單身」 「独身」 「変身」 「文身」 「相手の身になる」
 「身分」 「身分証明書」 「身の上」 「身の丈」 「身元」
 「身を起こす」 「身を固める」 「身重」 「身軽」

(56) 足𠄎𠄎𠄎 ソク あし た-りる た-る た-す たし

人の膝から下の足の形を象った文字です。膝から下の足、あるいは足首から先を表しています。訓読の“あし、”とは、人の足のこと、そこから馬や犬など動物の足、また机や椅子の足のように、物の下に突き出ているそれを支えるもの、動くもの、歩いたり走ったりする能力、交通機関や手段、また金銭、出費、相場の変動、「お足、足が出る、逃げ足が速い」などと用いられます。“たりる、たる、”とは、必要な分だけ数量があること、満ち整って十分であることです。そこから役に立つ、…するだけの価値がある、「…すれば足りる」と用いられます。“たす、”では、数量を加える、不足を補う、「水を足す、言葉を足す」、片付ける、済ます、「用を足す」、
 “たし、”とは、増やすこと、増し加えること、補い、助け、「足しにする、何の足しにもならない」と用いられます。“ソク、”の音読は、訓読の“あし、たりる、たす、”を意味する熟語を作ります。「足跡」はあしあと、行為のあと、業績、「禁足」は外出を禁ずること、閉じ込めること、「下足」は集会場などで脱いだ履き物、「遠足」は学校で行う日帰りの校外指導です。「人足」は力仕事に従事する労働者、「土足」は履き物を履いたままの足、「蛇足」はあっても無駄になること、余計なものです。「発足」は団体などの活動を開始すること、“ハッソク、”とも“ホッソク、”とも読みます。「不足」は数量や人員が必要なだけないこと、不十分なこと、「補足」は不十分なところを補い足すこと、説明を加えることです。「満足」は十分なこと、完全なこと、「充足」は十分に満たすこと、満ち足りること、「自足」は自分の必要を自分で満たすこと、自ら満足すること、「具足」は十分に備わっていること、また携帯品、道具、丁度です。“ソク、”はまた、履き物を数える単位として、両足分揃って「一足」と数えられます。漢点字では、「𠄎𠄎𠄎」で表されます。

「足跡」 「禁足」 「下足」 「遠足」 「人足」 「土足」 「蛇足」
 「発足」 「不足」 「補足」 「満足」 「充足」 「自足」 「具足」

* 漢点字符号「𧈧」で表される文字は、「耳、南、緑」に、「身、足」の二つの文字が加わりました。

※ 「虫𧈧、羽𧈧」

(57) 虫𧈧 チュウ むし

頭の大きな毒蛇である「まむし」を象った文字です。現在では、人類・獣類・鳥類・魚介を除いた小動物の総称で、昆虫の他、クモの類、百足の類、ミミズのような環形動物などを言います。「むし」はまた、「虫の居所、虫の知らせ、虫が納まる、虫がいい」とか、「鬱ぎの虫、癩の虫、腹の虫」などと用いられて、心の状態や働き、人の心の移ろい易さ、身勝手さを、人の身体や心の中に巣くっている虫が、そのような状態をもたらすと捉えています。音読の「チュウ」の熟語では、「昆虫」は節足動物の一、全動物の四分の三を占めていると言われるもので、身体は三つの節からなり、真ん中の節の胸部に三対の足、背部に二対の翅があります。私たちに身近な虫です。「爬虫類」は脊椎動物です。変温・肺呼吸・卵生で鱗に覆われて、多くは陸上生活に適応しています。蛇・トカゲ・亀・鱒、中生代には恐竜が繁栄していました。「害虫」は人間に害を与える虫、ノミ・ダニ・ゴキブリなど、「虫害」はその害虫による被害、「防虫」は害虫が侵入したり、衣服や書物に付いたりするのを防ぐこと、「除虫菊」は菊の仲間、蚊取り線香の原料となる植物です。「益虫」は直接に・間接に、人間生活に利益を与える虫、蚕や蜜蜂は生産物を提供してくれますし、蝶や蜂は作物の受粉を助けてくれます。トンボやカマキリのように、害虫を捕捉する虫もその中に数えられます。「幼虫」は昆虫などの卵からかえり成虫になる前の状態、「成虫」は幼虫から変態を経て、生殖能力のある形態になったものです。漢点字では、「𧈧」で表されます。

「昆虫」 「爬虫類」 「害虫」 「虫害」 「防虫」 「除虫菊」
「益虫」 「幼虫」 「成虫」 「虫の居所」 「虫の知らせ」
「虫が納まる」 「虫がいい」 「鬱ぎの虫」 「癩の虫」 「腹の虫」

* 「虫𧈧」を含む文字は、虫の名前や虫に関わる事柄を表しますが、現在私たちが虫と呼んでいるものばかりでなく、爬虫類・両生類・貝類・水生甲殻類にも「虫」の字が含まれています。

(58) 羽𧈧 ウ はね は

鳥の左右の羽の形を象った文字です。「はね」とは鳥の二つの翼、また鳥の全身に生えている羽毛のことです。そこから鳥の羽に似たもの、矢羽根や

飛行機の翼、扇風機やタービンの薄くて平たい部分などを言います。訓読で熟語が形成される場合は、「は」の読みが一般です。「羽根」は鳥の羽の根本、また鳥の全身を覆う羽毛、「羽子」は「はね」とも「はご」とも読まれて、羽子板で突いて遊ぶハネを言います。「羽撃く（はばたく）」は鳥が両翼を広げて打つこと、空へ向かって舞い上がろうとして翼を上下に動かすこと、「羽音（はおと）」は鳥が羽撃く音、虫が飛んでいる音、「羽振り（はぶり）」は鳥が羽を振ること、そこから人の世間における地位や勢力、人望を言い、「羽振りがよい」と用いられます。「羽衣（はごろも）」は天人が身にまとって空を飛ぶと言われる、鳥の羽でできた衣服、「羽織（はおり）」は上着の上に着る、襟を折った短い衣、「羽織る」は「羽織」に由来した言葉で、着物の上に打ち掛けて着ることです。「羽二重（はぶたえ）」は手触りのよい、平織りの高級な絹織物、紋付きなどの礼服に用いられる織物、「羽二重餅」は羽二重のように滑らかに搗いた餅で、高級な菓子です。「出羽の国（でわのくに）」は旧国名、現在の山形県と秋田県に相当します。音読の「ウ」によって作られる熟語は、「羽毛」は鳥の全身に生えている羽、「羽化」は昆虫が、蛹から出て成虫になり、羽が生えること、また、古代中国の信仰で、人間に羽が生えて仙人になること、「羽化登仙」とは、人に羽が生えて仙人になって、天に登ることを言います。「羽扇」は鳥の羽で作った扇、「羽翼」は鳥の羽と翼、左右から助けることです。「羽州」は出羽の国の略称、「奥羽」は陸奥と出羽、福島・宮城・岩手・青森・秋田・山形の六県を言い、現在では東北地方と呼び習わされています。漢点字では、「羽」で表されます。

「羽毛」 「羽化」 「羽扇」 「羽翼」 「羽州」 「奥羽」 「羽根」
「羽子」 「羽撃く」 「羽音」 「羽振り」 「羽衣」 「羽織」
「羽織る」 「羽二重」 「出羽の国」

* 点字符号「羽」で表される漢点字は、「車」に、「紫」に、「虫」
「羽」の二つが加わりました。

(59) 自 ジ シ みずか-ら おの-ずから
おの-ずと

「目」の上に小さなカタカナの「ノ」の形の点の付いた、顔の真ん中にあるハナの形を象った文字です。人は自分を指す時、自分のハナを指し示します。そこでハナを意味する文字が別に作られて、この文字は自分を表す文字となりました。訓読の「みずから」は自分自身、自分から、自分自身で、おのれ、本人などの意味を、「おのずから」はありのままのもの、独りでに、自然に、たまたま、偶然になどの意味を、「おのずと」は独りでに、自然にという意味を表します。音読の「ジ、シ」が作る熟語は、「自分」はおのれ、自身、自己、自分自身の能力、「自身」は自分、みずから、自体、「自己」は

われ、おのれ、自分、その人自身、「自体」は自分の身体、そのもの、それ自身を意味します。「自愛」は自分を大切にすること、品行を慎むこと、物を愛すること、「自在」は思いのままであること、束縛も支障もなく心のままであること、「自認」は自分から認めることです。「自負」は自分の能力や仕事に自信を持ち誇ることに、「自信」は自分の能力や価値を確信すること、自分の正しさを疑わない心、「自立」は自分の力で物事をやって行くこと、独り立ちすることです。「出自」はどのような家柄から出たかということ、生まれ、「独自」は自分一人、また、他と違い、そのものだけにあること、「自然」は「シゼン」とも「ジネン」とも読んで、自ずからそうなっている、人為が加わっていない、あるがままの状態であることです。またこの文字は、「至」(至) (このテキストにはまだ出ていません) と組んで、「…から…まで」という意味を表しても用いられます。漢点字では、「𠄎𠄎」で表されます。

「自分」 「自身」 「自己」 「自体」 「自愛」 「自在」 「自認」
「自負」 「自信」 「自立」 「出自」 「独自」 「自然」

* 点字符号「𠄎」で表される漢点字「目、百、真、面、龜」に、「自」が加わりました。

書き取り 題 (27)

- (1) れいだんぼうはこのきぐです。
 - (2) つめたいひとだね。
 - (3) くうきがひえている。
 - (4) てがひえる。
 - (5) あたまをひやしてあげる。
 - (6) おちやがさめる。
 - (7) のぼせをさましなさい。
 - (8) ひややかにこたえる。
 - (9) いしょくじゅうがきほんだ。
 - (10) 「しえ」とはむらさきのころも。
-
- (11) きせつごとにくろもがえをします。
 - (12) きぬかつぎってさといものこですってね。
 - (13) アメリカでつかわれているえいごをべいごという。
 - (14) もう、しんまいをたべたよ。
 - (15) しゅしょくとして、こめはすばらしい。
 - (16) こめからつくるすはよねずです。
 - (17) いっしゃくをメートルほうであらわす。
 - (18) こうえんかいはえんきしました。
 - (19) かいきがのびる。
 - (20) ぎんのきせるをのべる。
-
- (21) うどんをのぼす。
 - (22) のべ、おいくらですか。
 - (23) ともだちぜんいでささえあう。
 - (24) おおきなかわのしりゅう。
 - (25) ゆうぼくのたみ。
 - (26) そとあそびをしなさい。
 - (27) たのしくあそぶ。
 - (28) ねつがでたようだ、おでこがあつい。
 - (29) おんがくによせるあついおもい。
 - (30) しゅううんのべんがよい。
-
- (31) ふなあそびがしたい。
 - (32) ゆぶねにはいる。
 - (33) ねりぐすりのじんたん。

- (34) しゅいろのつちを「に」といった。
(35) おうさまのみみはろばのみみ。
(36) おうけのたにがエジプトに。
(37) しょうぎだおしになってたおれた。
(38) まさにしぬところだったよ。
(39) せかいのしゅしよくをしらべる。
(40) もちぬしをさがそう。
- (41) あるじ、あるじはおらんか。
(42) おもなしゅつえんしゃ。
(43) いっちょういっせきにはできない。
(44) ゆうはんはなににしよう。
(45) きゅうしにいっしょうをえる。
(46) しぬきでやればなんでもできる。
(47) りっぼうたいのいえがたっている。
(48) へいべいはつかうけれどりゅうべいは？
(49) おわるまでやっとなっていた。
(50) たかいところざしをたてる。
- (51) リットルはかんじでかくと 。
(52) はっとうしんのびじん。
(53) みにおぼえがないのです。
(54) くつはいっそく、にそくとかぞえます。
(55) あしをあらって でなおす。
(56) これでじゅうぶんたりますよ。
(57) くふうがたらないね。
(58) ひやくまんにじゅうまんをたすと？
(59) さんようちゅうはむしにみえないなあ。
(60) こんちゅうはもつともしゆるいがおおい
せいぶつだとか。
- (61) はねぶとんはかるい。
(62) はねつきをむかしよくやりました。
(63) しらはのやをたてる。
(64) じぶんにじしんをもつ。
(65) よのなかのことはおのずとまるくおさまっていく。
(66) みずからのかんがえ。
(67) おのずからこたえがうかぶ。

* * * * *



ティー・タイム

宮賢治 「鉄の夜」より

、後の授業

「ではみなさんは、そういうふうにだとわれたり、の流れたあとだとわれたりしていたこのぼんやりと白いものがほんとうはかご承知ですか。」は、に吊したきない座の図の、からへ白くけぶった帯のようなところを指しながら、みんなにをかけました。

カムパネルラがをあげました。それからをあげました。ジョバンニもをあげようとして、急いでそのままやめました。たしかにあれがみんなだと、いつか雑誌で読んだのですが、このごろ

はジョバンニはまるで毎教室でもねむく、を読むひまも読むもないので、なんだかどんなこともよくわからないという気ちがするのでした。

ところがはくもそれを附けたのでした。

「ジョバンニさん。あなたはわかっているのでしょうか。」

ジョバンニは勢よくちあがりましたが、ってるともうはっきりとそれをえることができないのでした。ザネリが前の席からふりかえって、ジョバンニをてくすつとわらいました。ジョバンニはもうどぎまぎしてまっになってしまいました。がまたいました。

「きな望遠鏡でをよっく調べるとはでしょう。」

やっぱりだとジョバンニはいましたがこんどもすぐにえることができませんでした。

はしばらくったようすでしたが、をカムパネルラのへ向けて、

「ではカムパネルラさん。」と名指しました。するとあんなに気にをあげたカムパネルラが、やはりもじもじちったままや

新編はここにたくさんある砂のつぶの入った大きなレンズのレンズを指しました。

「新編のレンズのレンズはちょうどこんななのです。このいちいちのつぶがみんな子どもの太陽と同じようにじぶんでつぶっているのだと教えてください。子どもの太陽がこのほぼごろにあって地球がそのすぐ近くにあるとします。みなさんは夜にこのまん中につぶってこのレンズのレンズをまわすとしてごらんください。こっちはレンズが薄いのでわずかのつぶる粒即ちしか見えないのでしょう。こっちやこっちのつぶはガラスが厚いので、つぶる粒即ちががたくさん見えその遠いのはぼうっと白く見えるというこれがつまり今のレンズのつぶなのです。そんならこのレンズの大きさがどれ位あるかまたそのつぶのさまざまのつぶについてはもう教えてくださいですからこの次の理のつぶにお見します。では今はそのつぶのおつぶなのですからみなさんは外へでてよくそらをごらんください。ではここまでです。つぶやノートをおしまいください。」

そして教室はしばらく机の蓋をあけたりしめたりつぶをねたりする音がいっぱいでしたがまもなくみんなはきちんとつぶって礼をすると教室を閉めました。

新編「新編 銀河鉄道の夜」冒頭部分
(青空文庫のテキスト使用)

新潮文庫「新編 銀河鉄道の夜」
冒頭部分
(青空文庫のテキスト使用)



第 1 回

基本文字 (1)

漢数字 (一)

- | | | | | | |
|------|------|------|------|------|------|
| 1 一 | 2 二 | 3 三 | 4 四 | 5 五 | 6 六 |
| 7 七 | 8 八 | 9 九 | 10 十 | 11 廿 | 12 百 |
| 13 千 | 14 万 | 15 億 | 16 兆 | * 〇 | |

《近似文字》

亜 (一)、参 (三)、丸 (九)、意 (億)、元 (兆)

基本文字 (2)

第一基本文字

- | | | | | | | | |
|------|------|------|------|------|------|------|-----|
| 1 目 | 2 糸 | 3 系 | 4 比 | 5 数 | 6 家 | 7 宿 | 8 学 |
| 9 言 | 10 語 | 11 頁 | 12 貝 | 13 金 | 14 木 | 15 草 | |
| 16 犬 | 17 子 | 18 都 | 19 市 | 20 発 | 21 食 | 22 馬 | |
| 23 田 | 24 竹 | 25 土 | 26 手 | 27 戸 | 28 人 | 29 仁 | |
| 30 水 | 31 氷 | 32 力 | 33 示 | 34 私 | 35 走 | 36 進 | |
| 37 火 | 38 女 | 39 玉 | 40 方 | 41 石 | 42 耳 | 43 車 | |
| 44 門 | 45 病 | 46 行 | 47 店 | 48 月 | 49 肉 | 50 分 | |
| 51 日 | 52 性 | 53 心 | 54 口 | 55 囿 | 56 十 | 57 止 | |

《近似文字》

真 (目)、云 (言)、首 (頁)、具 (貝)、未 (木)、由 曲 (田)、永 (氷)、必 (心)、才 (十)、正 (止)

第 2 回

複合文字 (1)

漢数字および第一基本文字を部首とした文字

- | | | | | | |
|------|------|------|------|------|------|
| 1 林 | 2 森 | 3 材 | 4 相 | 5 想 | 6 果 |
| 7 課 | 8 休 | 9 保 | 10 来 | 11 味 | 12 体 |
| 13 字 | 14 宗 | 15 宝 | 16 安 | 17 案 | 18 穴 |
| 19 究 | 20 完 | 21 院 | 22 軍 | 23 計 | 24 早 |
| 25 協 | 26 直 | 27 朝 | 28 世 | 29 葉 | 30 古 |
| 31 苦 | 32 枯 | 33 湖 | 34 有 | 35 存 | 36 在 |
| 37 聞 | 38 間 | 39 問 | 40 開 | 41 閉 | 42 回 |
| 43 国 | 44 固 | 45 個 | 46 兄 | 47 見 | 48 介 |
| 49 先 | 50 祝 | * 兌 | 51 説 | 52 税 | 53 覚 |
| 54 視 | 55 界 | 56 榮 | 57 勞 | 58 加 | 59 賀 |
| 60 化 | 61 花 | 62 貨 | 63 信 | 64 恋 | 65 芸 |
| 66 会 | 67 絵 | 68 伝 | 69 転 | 70 秋 | 71 畑 |
| 72 炎 | 73 談 | 74 点 | 75 然 | 76 燃 | |

第 3 回

- | | | | | | |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 77 品 | 78 唱 | 79 単 | 80 和 | 81 合 | 82 給 |
| 83 拾 | 84 答 | 85 員 | 86 損 | 87 史 | 88 使 |
| 89 舌 | 90 活 | 91 舎 | 92 話 | 93 絹 | 94 季 |
| 95 委 | 96 好 | 97 姉 | 98 妹 | 99 男 | 100 細 |
| 101 思 | 102 胃 | 103 油 | 104 典 | 105 悪 | 106 応 |
| 107 係 | 108 孫 | 109 泳 | 110 混 | 111 財 | 112 社 |
| 113 証 | 114 徒 | 115 道 | 116 貧 | 117 防 | 118 明 |
| 119 庫 | 120 連 | 121 更 | 122 便 | 123 能 | 124 態 |

基本文字 (3)

比較文字

対、あるいはグループをなす比較文字

- | | | | | | |
|------|------|------|------|------|------|
| 1 父 | 2 母 | 3 上 | 4 中 | 5 下 | 6 右 |
| 7 左 | 8 大 | 9 小 | 10 出 | 11 入 | 12 高 |
| 13 低 | 14 優 | 15 良 | 16 可 | 17 東 | 18 西 |
| 19 南 | 20 北 | 21 鶴 | 22 亀 | 23 互 | 24 皆 |
| 25 凸 | 26 凹 | | | | |

《近似文字》

天 (太)、夫 (大)、片 (出)、氏 (低)

第 4 回

長さ、重さ、容積の単位を表す比較文字

- | | | | | | |
|------|------|------|------|------|------|
| 27 尺 | 28 寸 | 29 文 | 30 里 | 31 貫 | 32 匁 |
| 33 斤 | 34 屯 | 35 升 | 36 斗 | 37 勺 | |

《近似文字》

斥 (斤)、丘 (升)

比較文字に類似した漢字

- | | | | |
|-----|-----|-----|-----|
| 1 乘 | 2 垂 | 3 浮 | 4 沈 |
|-----|-----|-----|-----|

複合文字 (2)

- | | | | | | |
|------|------|------|------|------|------|
| 1 仲 | 2 沖 | 3 忠 | 4 若 | 5 佐 | 6 器 |
| 7 春 | 8 因 | 9 恩 | 10 央 | 11 英 | 12 関 |
| 13 送 | 14 規 | 15 贊 | 16 肖 | 17 消 | 18 底 |
| 19 紙 | 20 朗 | 21 娘 | 22 郎 | 23 浪 | 24 眼 |
| 25 銀 | 26 根 | 27 限 | 28 退 | 29 既 | 30 阿 |
| 31 河 | 32 何 | 33 荷 | 34 奇 | 35 寄 | 36 練 |
| 37 煙 | 38 要 | 39 票 | 40 標 | 41 階 | 42 駅 |
| 43 沢 | 44 訳 | 45 守 | 46 村 | 47 討 | 48 冠 |
| 49 団 | 50 導 | 51 付 | 52 府 | 53 寺 | 54 詩 |
| 55 持 | 56 待 | 57 等 | 58 時 | 59 年 | 60 秒 |
| 61 量 | 62 重 | 63 種 | 64 動 | 65 働 | 66 慣 |
| 67 負 | 68 免 | 69 勉 | 70 近 | 71 質 | 72 所 |
| 73 折 | 74 純 | 75 昇 | 76 兵 | 77 浜 | 78 科 |
| 79 約 | 80 睡 | | | | |

第 5 回

基本文字 (4)

発音文字

- | | | | | | |
|-----|-----|-----|------|-----|-----|
| 1 円 | 2 鬼 | 3 告 | 4 事 | 5 生 | 6 争 |
| 7 对 | 8 拝 | 9 反 | 10 民 | | |

漢数字 (二) (十干)^{じっかん}

- | | | | | | |
|-----|-----|-----|------|-----|-----|
| 1 甲 | 2 乙 | 3 丙 | 4 丁 | 5 戊 | 6 己 |
| 7 庚 | 8 辛 | 9 壬 | 10 癸 | | |

複合文字 (3)

発音文字を部首として含む文字

- | | | | | | |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 1 星 | 2 仮 | 3 坂 | 4 阪 | 5 板 | 6 飯 |
| 7 返 | 8 版 | | | | |

「漢数字 (二)」 (十干) を部首として含む文字

- | | | | | | |
|------|------|------|------|------|------|
| 9 押 | 10 乱 | 11 打 | 12 町 | 13 灯 | 14 頂 |
| 15 貯 | 16 斤 | 17 成 | 18 誠 | 19 城 | 20 感 |
| 21 減 | 22 紀 | 23 記 | 24 起 | 25 辞 | 26 任 |
| 27 貫 | | | | | |

複合文字 (4)

紹介し落とした文字

- | | | | | | |
|------|------|------|------|------|------|
| 1 映 | 2 革 | 3 揮 | 4 禁 | 5 筋 | 6 形 |
| 7 研 | 8 県 | 9 吾 | 10 孔 | 11 乳 | 12 祭 |
| 13 際 | 14 察 | 15 算 | 16 実 | 17 捨 | 18 洗 |
| 19 箱 | 29 批 | 21 弁 | 22 訪 | 23 郵 | |

第 6 回

紹介し落とした文字、および
基本文字にない象形文字・会意文字

- | | | | | | |
|------|------|------|------|------|------|
| 24 沿 | 25 価 | 26 簡 | 27 寒 | 28 漢 | 29 官 |
| 30 館 | 31 管 | 32 追 | 33 貴 | 34 遺 | 35 求 |
| 36 去 | 37 法 | 38 勤 | 39 兼 | 40 困 | 41 妻 |
| 42 勝 | 43 植 | 44 値 | 45 針 | 46 昔 | 47 借 |
| 48 倉 | 49 操 | 50 束 | 51 速 | 52 策 | 53 潮 |
| 54 肺 | 55 背 | 56 半 | 57 晚 | 58 秘 | 59 飛 |
| 60 富 | 61 福 | 62 仏 | 63 僕 | 64 無 | 65 余 |
| 66 除 | 67 令 | 68 領 | | | |

基本文字 (5)

第二基本文字

- | | | | | | |
|------|------|------|------|------|------|
| 1 幼 | 2 写 | 3 与 | 4 愛 | 5 光 | 6 文 |
| 7 君 | 8 川 | 9 州 | 10 工 | 11 陸 | 12 色 |
| 13 赤 | 14 黒 | 15 黄 | 16 青 | 17 緑 | 18 紫 |
| 19 巾 | 20 冬 | 21 久 | 22 罪 | 23 虎 | 24 鳥 |
| 25 魚 | 26 酉 | 27 曾 | 28 牛 | 29 午 | 30 羊 |
| 31 豚 | 32 象 | 33 谷 | 34 雨 | 35 兩 | 36 士 |
| 37 居 | 38 老 | 39 考 | 40 冷 | 41 衣 | 42 米 |
| 43 延 | 44 支 | 45 遊 | 46 熱 | 47 舟 | 48 丹 |
| 49 王 | 50 将 | 51 主 | 52 夕 | 53 死 | 54 立 |
| 55 身 | 56 足 | 57 虫 | 58 羽 | 59 自 | |